第４章 事業所の状況

1　事業所の概要

(1) 利用者の定員

利用者の定員は、「11～20 人以下」の割合が最も高く 39.7%だった。次いで、「10 人以下」が 20.0%だった。

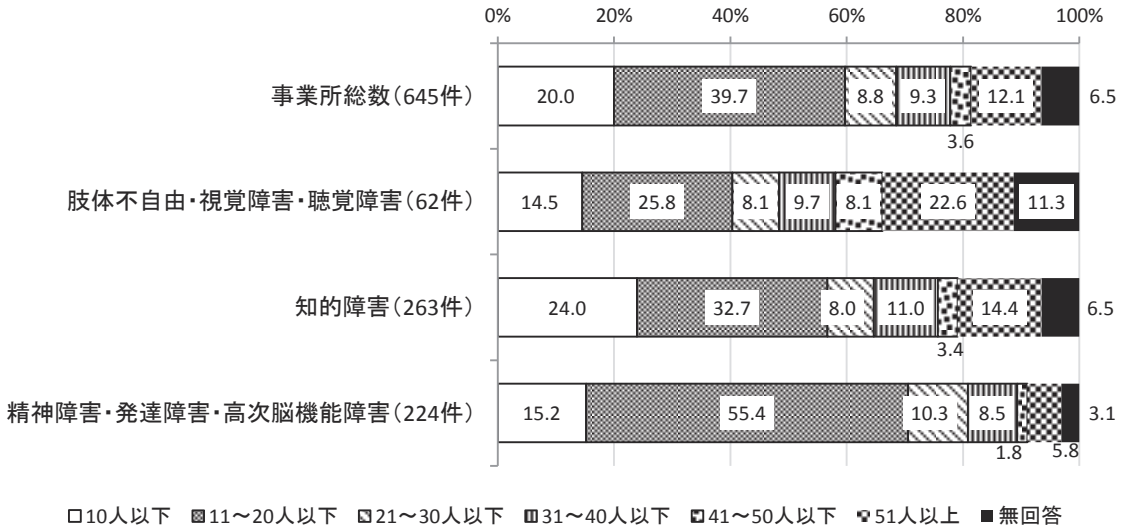
最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「11～20 人以下」の割合が最も高く 25.8%だった。次いで、「51 人以上」が 22.6%だった。

知的障害では、「11～20 人以下」の割合が最も高く 32.7%だった。次いで、「10 人以下」が 24.0%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「11～20 人以下」の割合が最も高く 55.4%だった。次いで、「10 人以下」が 15.2%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、知的障害は「10 人以下」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「11～20 人以下」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-1　利用者の定員〔数値回答〕（Q1）－最も利用者数が多い障害種別



(2) 利用者数

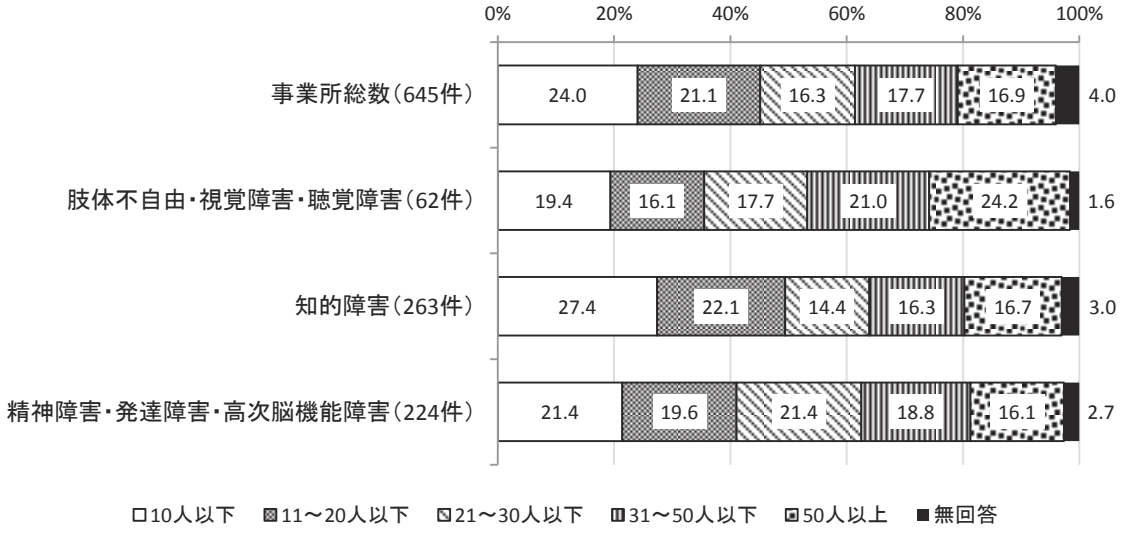
利用者数は、「10 人以下」の割合が最も高く 24.0%だった。次いで、「11～20 人以下」が 21.1%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「50 人以上」の割合が最も高く 24.2%だった。次いで、「31～50 人以下」が 21.0%だった。

知的障害では、「10 人以下」の割合が最も高く 27.4%だった。次いで、「11～20 人以下」が 22.1%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「10 人以下」「21～30 人以下」の割合が最も高く 21.4%だった。次いで、「11～20 人以下」が 19.6%だった。

図表 4-2　利用者数〔数値回答〕（Q2）－最も利用者数が多い障害種別



(3) 利用者の平均年齢

利用者の平均年齢は、「40 代」の割合が最も高く 38.6%だった。次いで、「30 代」が 31.2%だった。

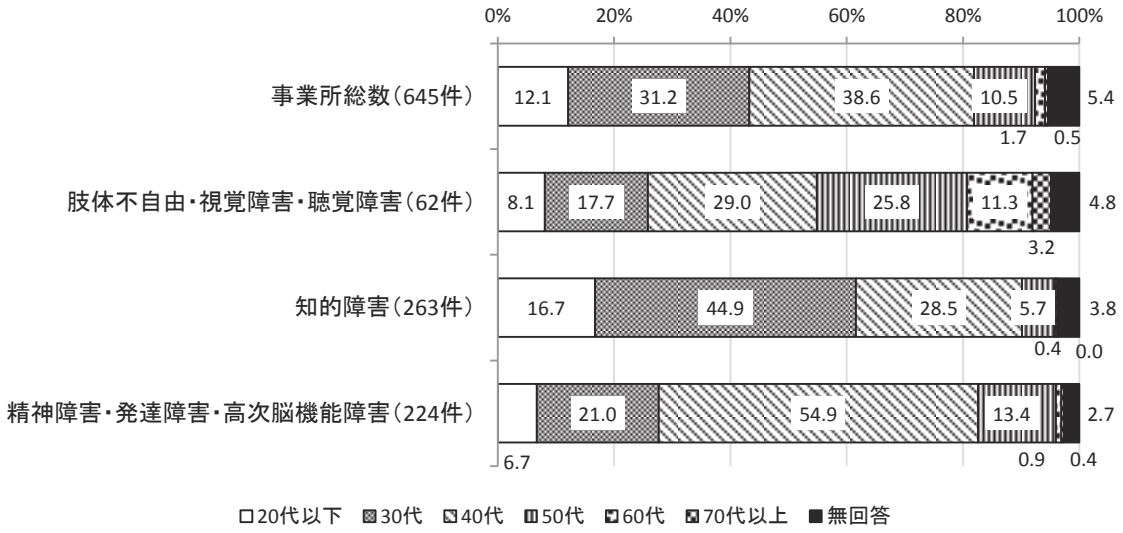
最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「40 代」の割合が最も高く 29.0%だった。次いで、「50 代」が 25.8%だった。

知的障害では、「30 代」の割合が最も高く 44.9%だった。次いで、「40 代」が 28.5%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「40 代」の割合が最も高く 54.9%だった。次いで、「30 代」が 21.0%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「50 代」、知的障害は「30 代」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「40 代」の割合が高い傾向にあった。

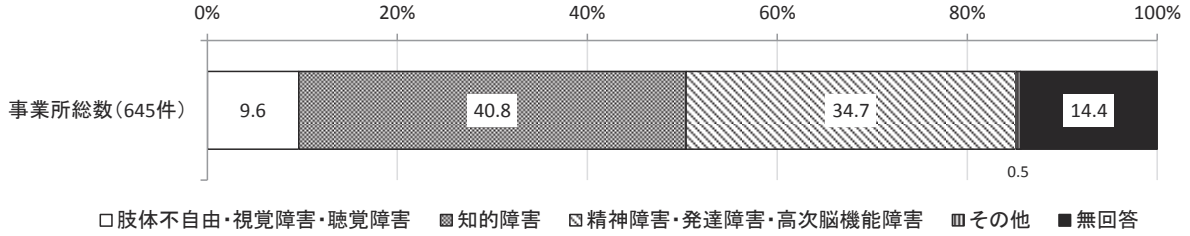
図表 4-3　利用者の平均年齢〔単数回答〕（Q3）－最も利用者数が多い障害種別



(4) 利用者の障害名

最も利用者数が多い障害種別について、「肢体不自由・視覚障害・聴覚障害」（身体障害）、「知的障害」、「精神障害・発達障害・高次脳機能障害」の３グループに分けて割合をみると、「肢体不自由・視覚障害・聴覚障害」（身体障害）が 9.6%、「知的障害」が 40.8%、「精神障害・発達障害・高次脳機能障害」が 34.7%だった。

図表 4-4　最も利用者が多い障害種別〔単数回答〕（Q4）



※最も利用者が多い障害として「音声・言語・そしゃく機能障害」「内部障害、難病等」を選択した事業所は０件だった。

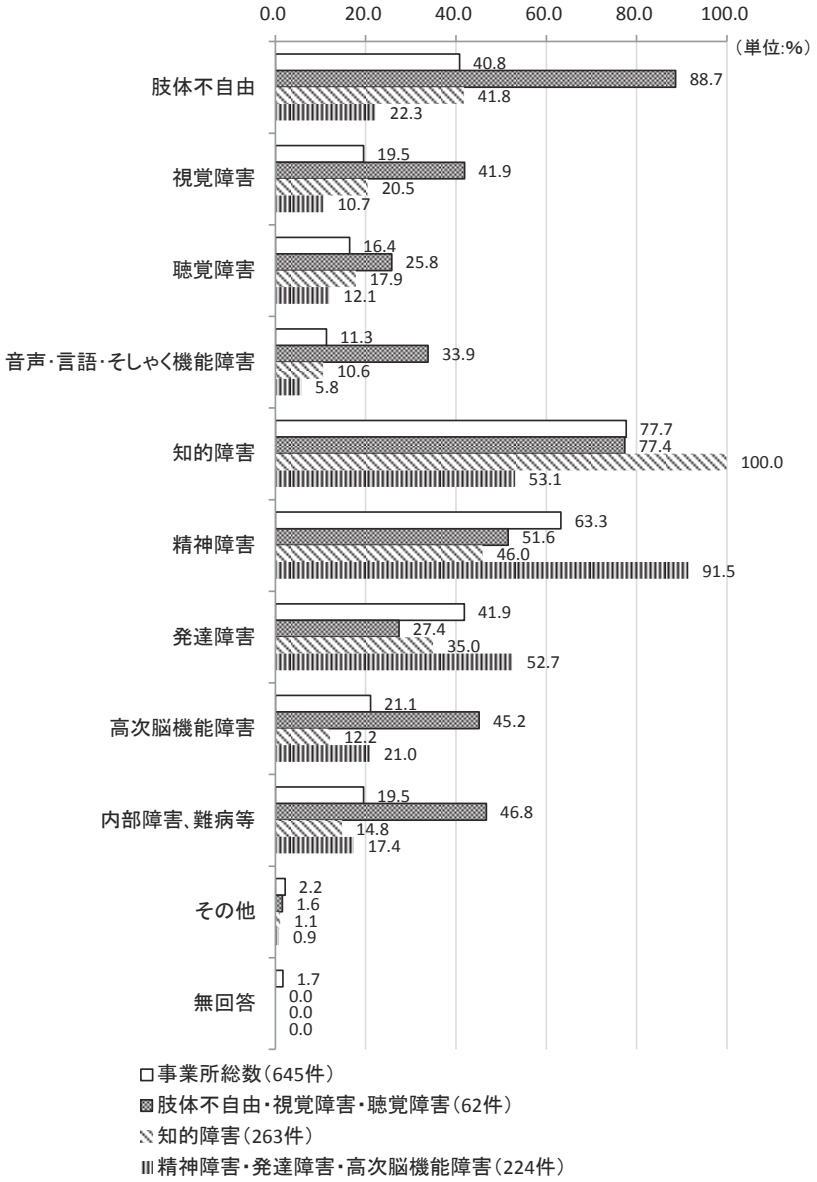
利用者の障害名について、当てはまる障害について尋ねたところ、「知的障害」の割合が最も高く 77.7%だった。次いで、「精神障害」が 63.3%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「肢体不自由」の割合が最も高く 88.7%だった。次いで、「知的障害」が 77.4%だった。

知的障害では、「知的障害」が 100.0%だったほか、「精神障害」が 46.0%、「肢体不自由」が 41.8%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「精神障害」が 91.5%、「知的障害」が 53.1%、「発達障害」が 52.7%、「高次脳機能障害」が 21.0%だった。

図表 4-5　利用者の障害名〔複数回答〕（Q4）



(5) 提供している障害福祉サービス事業等

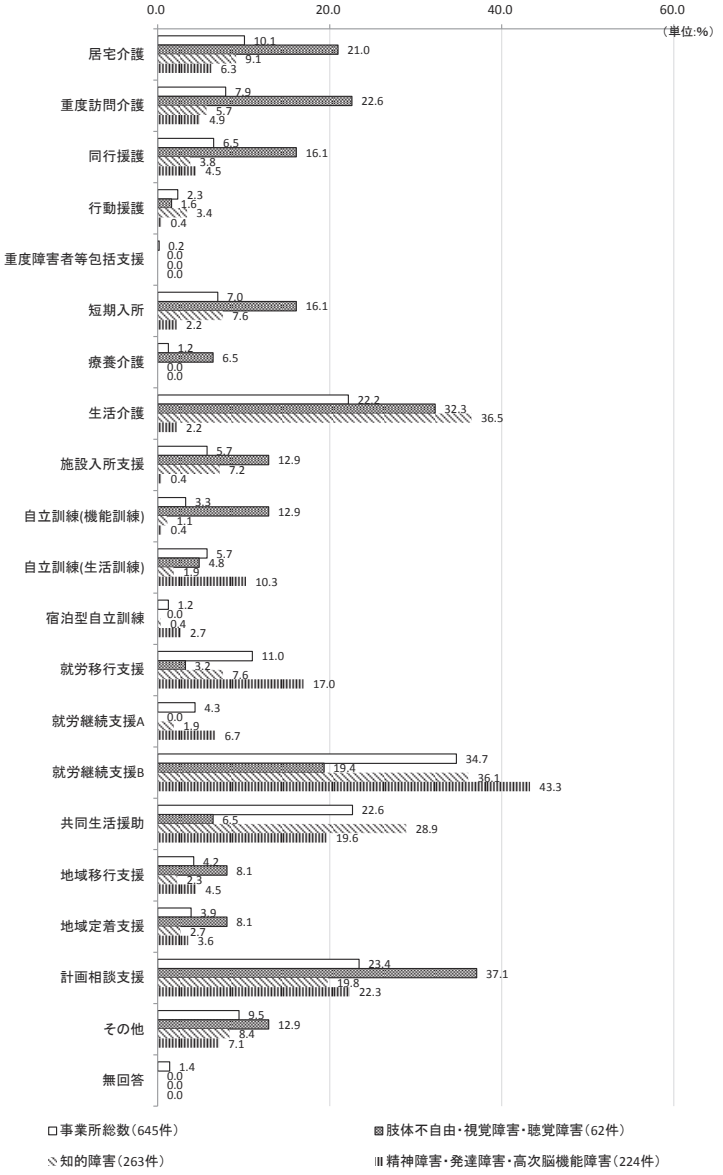
提供している障害福祉サービス事業等は、「就労継続支援 B」の割合が最も高く 34.7%だった。次いで、「計画相談支援」が 23.4%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「計画相談支援」の割合が最も高く 37.1%だった。次いで、「生活介護」が 32.3%だった。

知的障害では、「生活介護」の割合が最も高く 36.5%だった。次いで、「就労継続支援 B」が 36.1%、「共同生活援助」が 28.9%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「就労継続支援 B」の割合が最も高く 43.3%だった。次いで、「計画相談支援」が 22.3%、「共同生活援助」が 19.6%だった。

図表 4-6　提供している障害福祉サービス事業等〔複数回答〕(Q5) ー最も利用者数が多い障害種別



2　スポーツや運動について

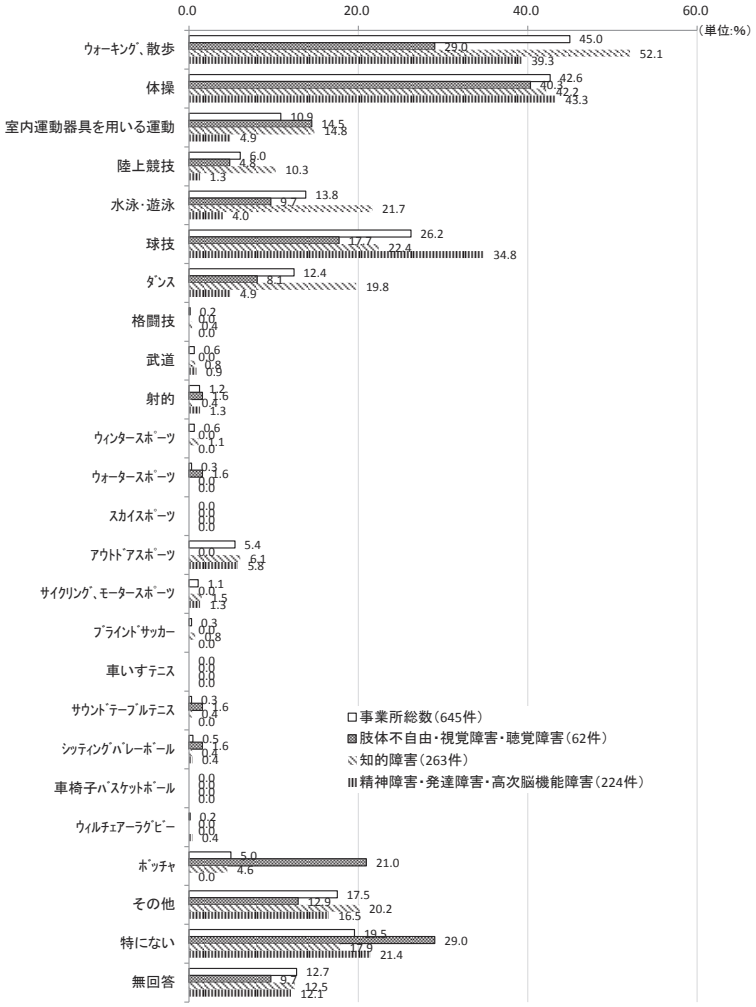
(1) この１年間に行ったスポーツや運動

この１年間のイベントや取組で行ったスポーツや運動については、「ウォーキング、散歩」の割合が最も高く、45.0%だった。次いで、「体操」が 42.6%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「体操」の割合が最も高く 40.3%だった。次いで、「ウォーキング、散歩」「特にない」がそれぞれ 29.0%だった。知的障害では、「ウォーキング、散歩」の割合が最も高く 52.1%だった。次いで、「体操」が 42.2%だった。精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「体操」の割合が最も高く 43.3%だった。次いで、「ウォーキング、散歩」が 39.3%、「球技」が 34.8%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「ボッチャ」、知的障害は「ウォーキング、散歩」「水泳・遊泳」「ダンス」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「球技」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-7　この１年間のイベントや取組で行ったスポーツや運動〔複数回答〕(Q6)
－最も利用者数が多い障害種別



(2) 今後も続けていきたい、あるいは新たに取り入れたいスポーツや運動

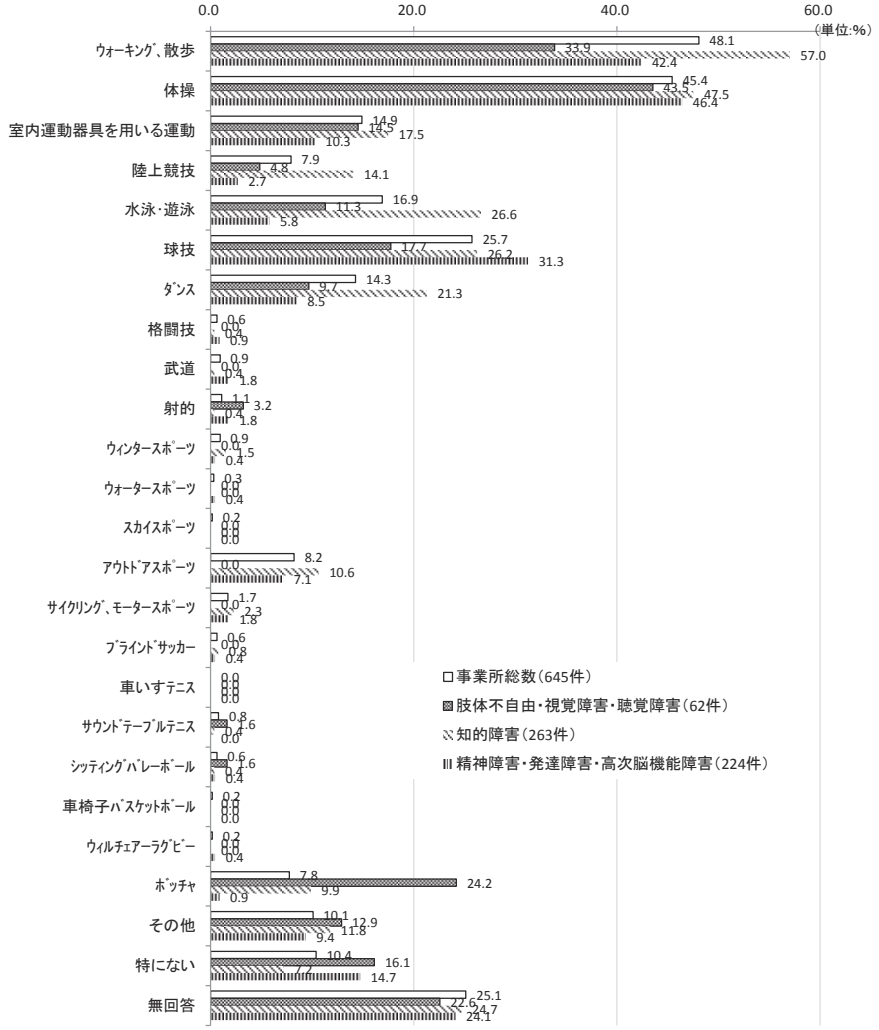
今後も続けていきたい、あるいは新たに取り入れたいスポーツや運動は、「ウォーキング、散歩」の割合が最も高く 48.1%だった。次いで、「体操」が 45.4%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「体操」の割合が最も高く 43.5%だった。次いで、「ウォーキング、散歩」が 33.9%だった。知的障害では、「ウォーキング、散歩」の割合が最も高く 57.0%だった。次いで、「体操」が 47.5%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「体操」の割合が最も高く 46.4%だった。次いで、「ウォーキング、散歩」が 42.4%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「ボッチャ」、知的障害は「ウォーキング、散歩」「陸上競技」「水泳・遊泳」「ダンス」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-8　今後も続けていきたい、あるいは新たに取り入れたいスポーツや運動〔複数回答〕（Q6）－最も利用者数が多い障害種別



(3) スポーツや運動を取り入れた理由

（※この１年間にスポーツや運動を行った 437 事業所が対象）

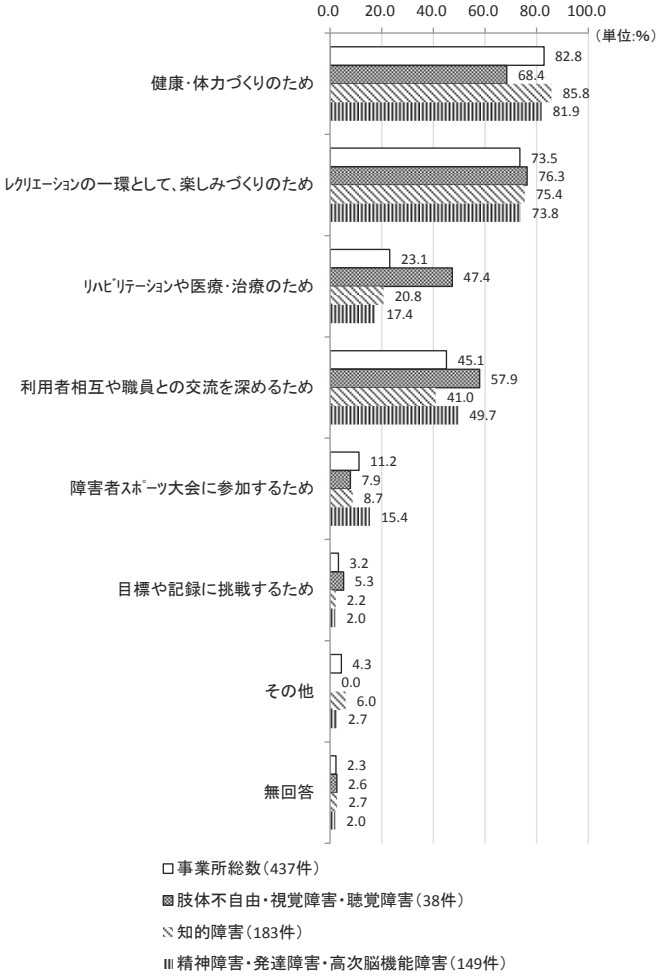
この１年間にスポーツを行った事業所について、イベントや取組にスポーツや運動を取り入れた理由をみると、「健康・体力づくりのため」の割合が最も高く 82.8%だった。次いで、「レクリエーションの一環として、楽しみづくりのため」が 73.5%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「レクリエーションの一環として、楽しみづくりのため」の割合が最も高く 76.3%だった。次いで、「健康・体力づくりのため」が 68.4%だった。

知的障害では、「健康・体力づくりのため」の割合が最も高く 85.8%だった。次いで、「レクリエーションの一環として、楽しみづくりのため」が 75.4%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「健康・体力づくりのため」の割合が最も高く 81.9%だった。次いで、「レクリエーションの一環として、楽しみづくりのため」が 73.8%だった。

図表 4-9　イベントや取組にスポーツや運動を取り入れた理由〔複数回答〕（Q6-1）
－最も利用者数が多い障害種別



(4) スポーツや運動の指導者

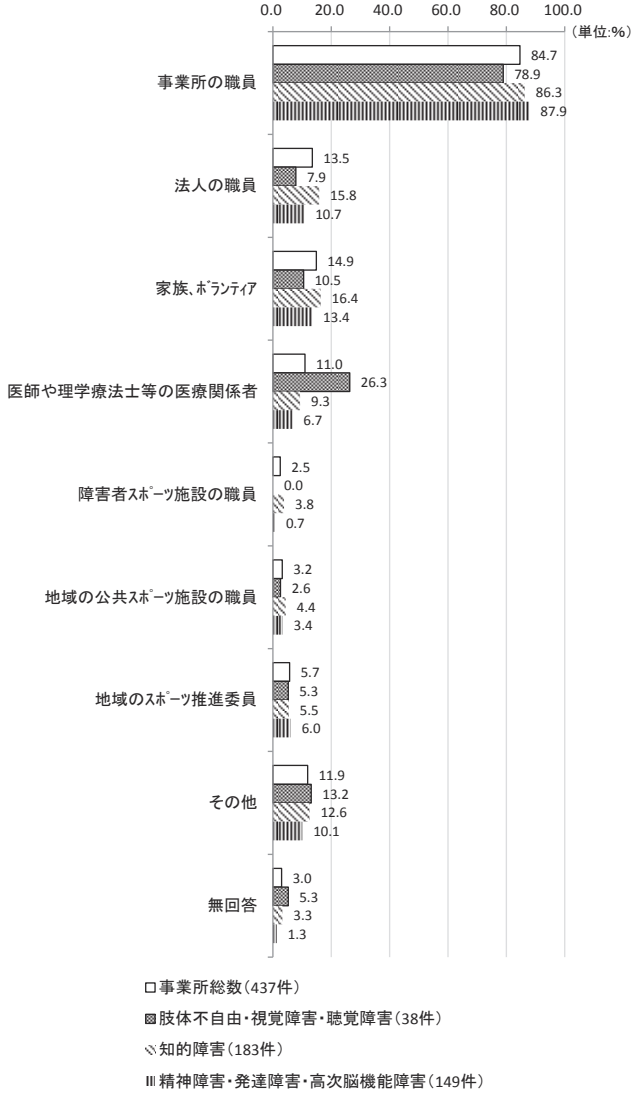
（※この１年間にスポーツや運動を行った 437 事業所が対象）

この１年間のイベントや取組でスポーツや運動を行った事業所について、スポーツや運動の指導者をみると、「事業所の職員」の割合が最も高く 84.7%だった。次いで、「家族、ボランティア」が 14.9%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「事業所の職員」の割合が最も高く 78.9%だった。次いで、「医師や理学療法士等の医療関係者」が 26.3%だった。知的障害では、「事業所の職員」の割合が最も高く 86.3%だった。次いで、「家族、ボランティア」が 16.4%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「事業所の職員」の割合が最も高く 87.9%だった。次いで、「家族、ボランティア」が 13.4%だった。

図表 4-10　スポーツや運動の指導者〔複数回答〕（Q6-2）－最も利用者数が多い障害種別



(5) スポーツや運動の指導者が有する資格

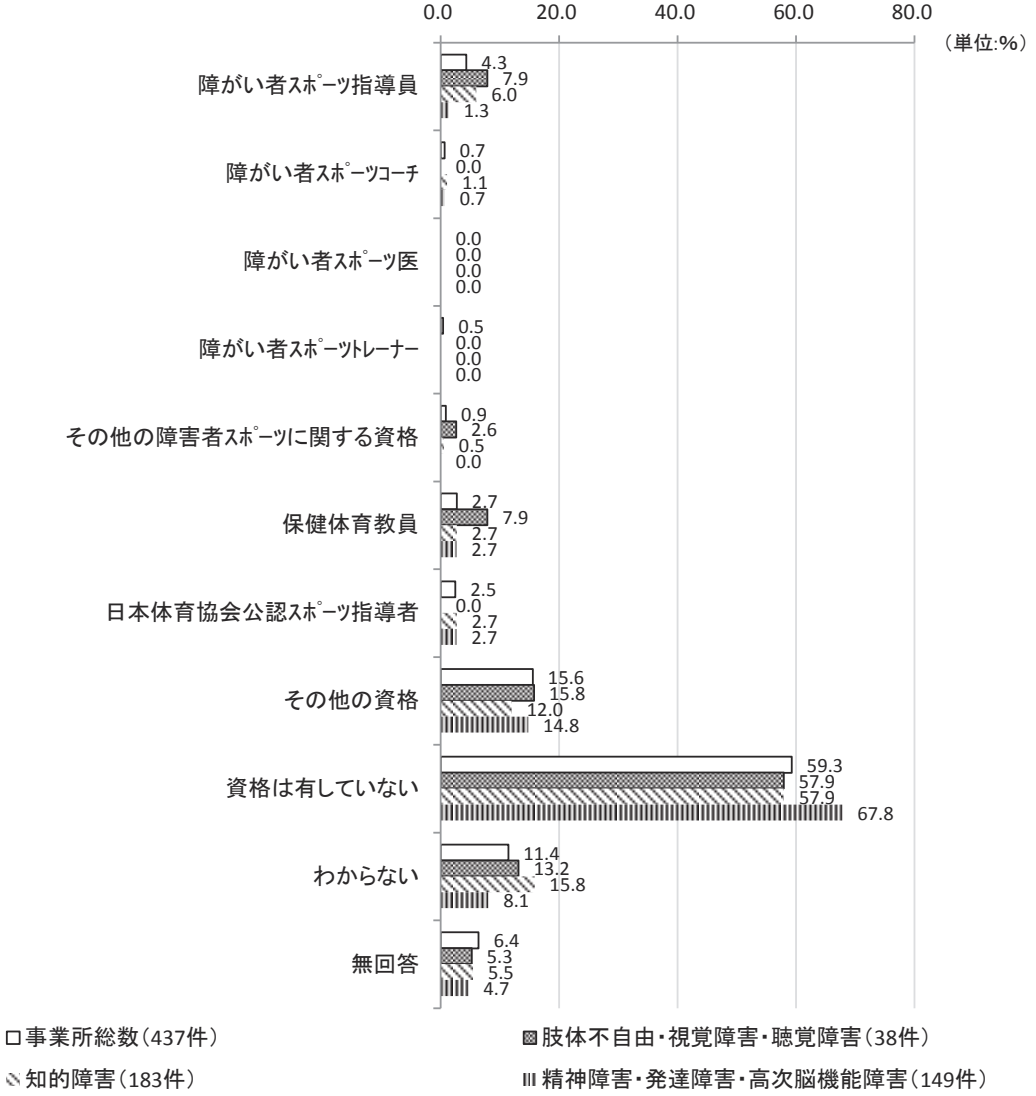
（※この１年間にスポーツや運動を行った 437 事業所が対象）

この１年間のイベントや取組でスポーツや運動を行った事業所について、スポーツや運動の指導者が有している資格をみると、「資格は有していない」の割合が最も高く 59.3%だった。次いで、「その他の資格」が 15.6%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、いずれも「資格は有していない」の割合が高く、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）、知的障害は 57.9%、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は 67.8%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「資格は有していない」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-11　スポーツや運動の指導者が有する資格〔複数回答〕（Q6-3）
ー最も利用者数が多い障害種別



(6) スポーツや運動を含むイベント・取組を行った場所

（※この１年間にスポーツや運動を行った 437 事業所が対象）

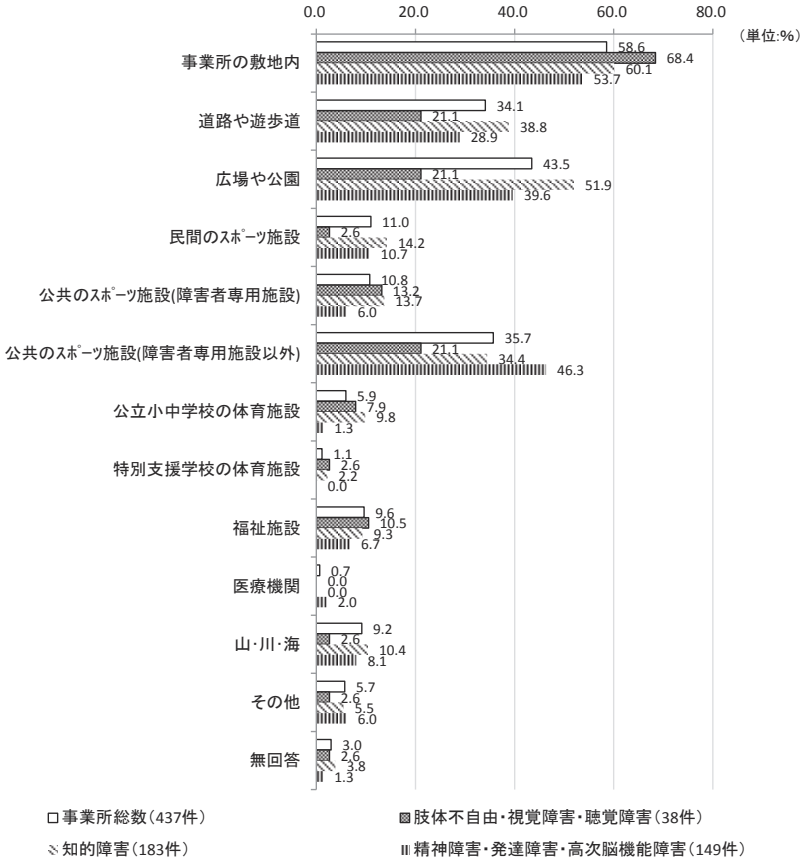
この１年間のイベントや取組でスポーツや運動を行った事業所について、スポーツや運動を含むイベント・取組を行った場所をみると、「事業所の敷地内」の割合が最も高く 58.6％だった。次いで、「広場や公園」が 43.5％だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「事業所の敷地内」の割合が最も高く 68.4％だった。次いで、「道路や遊歩道」「広場や公園」「公共のスポーツ施設（障害者専用施設以外）」がそれぞれ 21.1％だった。

知的障害では、「事業所の敷地内」の割合が最も高く 60.1％だった。次いで「広場や公園」が 51.9％だった。精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「事業所の敷地内」の割合が最も高く 53.7％だった。次いで、「公共のスポーツ施設（障害者専用施設以外）」が 46.3％だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、知的障害は「道路や遊歩道」「広場や公園」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「公共のスポーツ施設（障害者専用施設以外）」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-12　スポーツや運動を含むイベント・取組を行った場所〔複数回答〕（Q6-4）
－最も利用者数が多い障害種別



(7) 利用者がスポーツや運動を含むイベント・取組に参加しやすくするための工夫

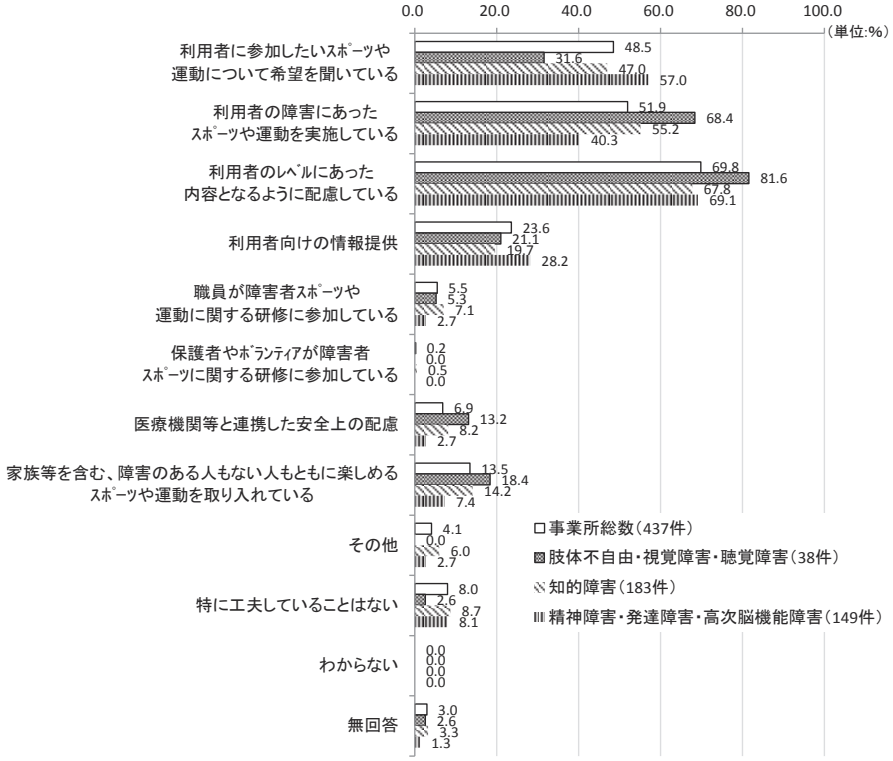
（※この１年間にスポーツや運動を行った 437 事業所が対象）

この１年間のイベントや取組でスポーツや運動を行った事業所について、利用者が参加しやすくするための運営上の工夫をみると、「利用者のレベルにあった内容となるように配慮している」の割合が最も高く 69.8%だった。次いで、「利用者の障害にあったスポーツや運動を実施している」が 51.9%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「利用者のレベルにあった内容となるように配慮している」の割合が最も高く 81.6%だった。次いで、「利用者の障害にあったスポーツや運動を実施している」が 68.4%だった。知的障害では、「利用者のレベルにあった内容となるように配慮している」の割合が最も高く、67.8%だった。次いで、「利用者の障害にあったスポーツや運動を実施している」が 55.2%だった。精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「利用者のレベルにあった内容となるように配慮している」の割合が最も高く、69.1%だった。次いで、「利用者に参加したいスポーツや運動について希望を聞いている」が 57.0%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「利用者の障害にあったスポーツや運動を実施している」「利用者のレベルにあった内容となるように配慮している」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「利用者に参加したいスポーツや運動について希望を聞いている」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-13　利用者がスポーツや運動を含むイベント・取組に
参加しやすくするための工夫〔複数回答〕（Q6-5）－最も利用者数が多い障害種別



(8) イベントや取組でスポーツや運動を行う際に必要な支援

イベントや取組でスポーツや運動を行う際に必要な支援は、「適切な指導者」の割合が最も高く 42.3%だった。次いで「障害にあわせたプログラムの充実」が 31.2%だった。

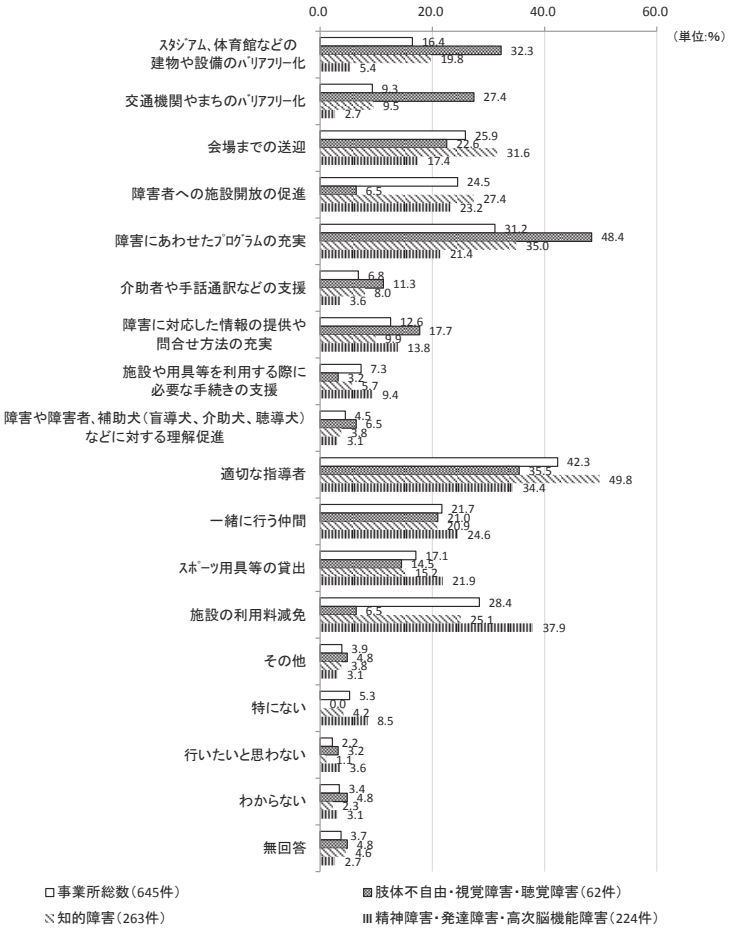
最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「障害にあわせたプログラムの充実」の割合が最も高く 48.4%だった。次いで、「適切な指導者」が 35.5%だった。

知的障害では、「適切な指導者」の割合が最も高く 49.8%だった。次いで「障害にあわせたプログラムの充実」が 35.0%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「施設の利用料減免」の割合が最も高く 37.9%だった。次いで、「適切な指導者」が 34.4%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「スタジアム、体育館などの建物や設備のバリアフリー化」「交通機関やまちのバリアフリー化」「障害にあわせたプログラムの充実」、知的障害は「適切な指導者」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「施設の利用料減免」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-14　イベントや取組でスポーツや運動を行う際に必要な支援〔３つまで〕（Q7）
－最も利用者数が多い障害種別



(9) 利用者がスポーツ観戦をする上で必要な支援

利用者がスポーツ観戦をする上で必要な支援は、「観戦料の減免」の割合が最も高く46.5%だった。次いで、「障害者に配慮した観戦席の充実」が 41.6%だった。

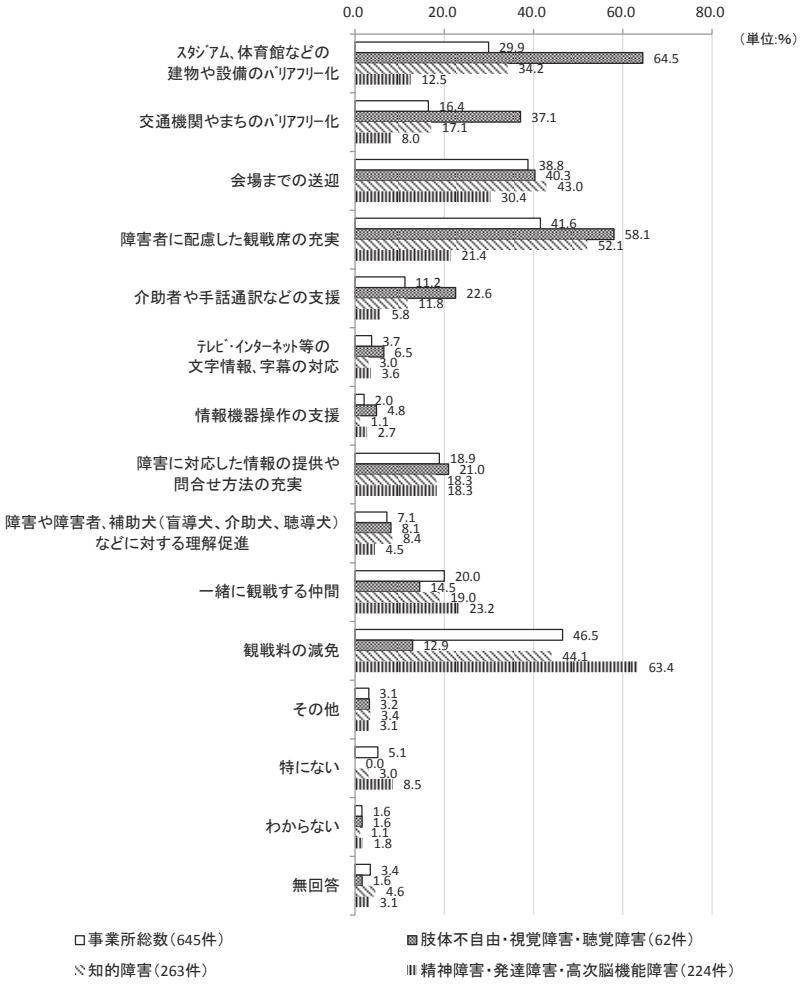
最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「スタジアム、体育館などの建物や設備のバリアフリー化」の割合が最も高く 64.5%だった。次いで、「障害者に配慮した観戦席の充実」が 58.1%だった。

知的障害では、「障害者に配慮した観戦席の充実」の割合が最も高く 52.1%だった。次いで、「観戦料の減免」が 44.1%、「会場までの送迎」が 43.0%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「観戦料の減免」の割合が最も高く 63.4%だった。次いで、「会場までの送迎」が 30.4%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「スタジアム、体育館などの建物や設備のバリアフリー化」「交通機関やまちのバリアフリー化」「介助者や手話通訳などの支援」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「観戦料の減免」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-15 利用者がスポーツ観戦をする上で必要な支援〔３つまで〕（Q8）
ー最も利用者数が多い障害種別



3　東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会について

(1) 東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会での関わり方

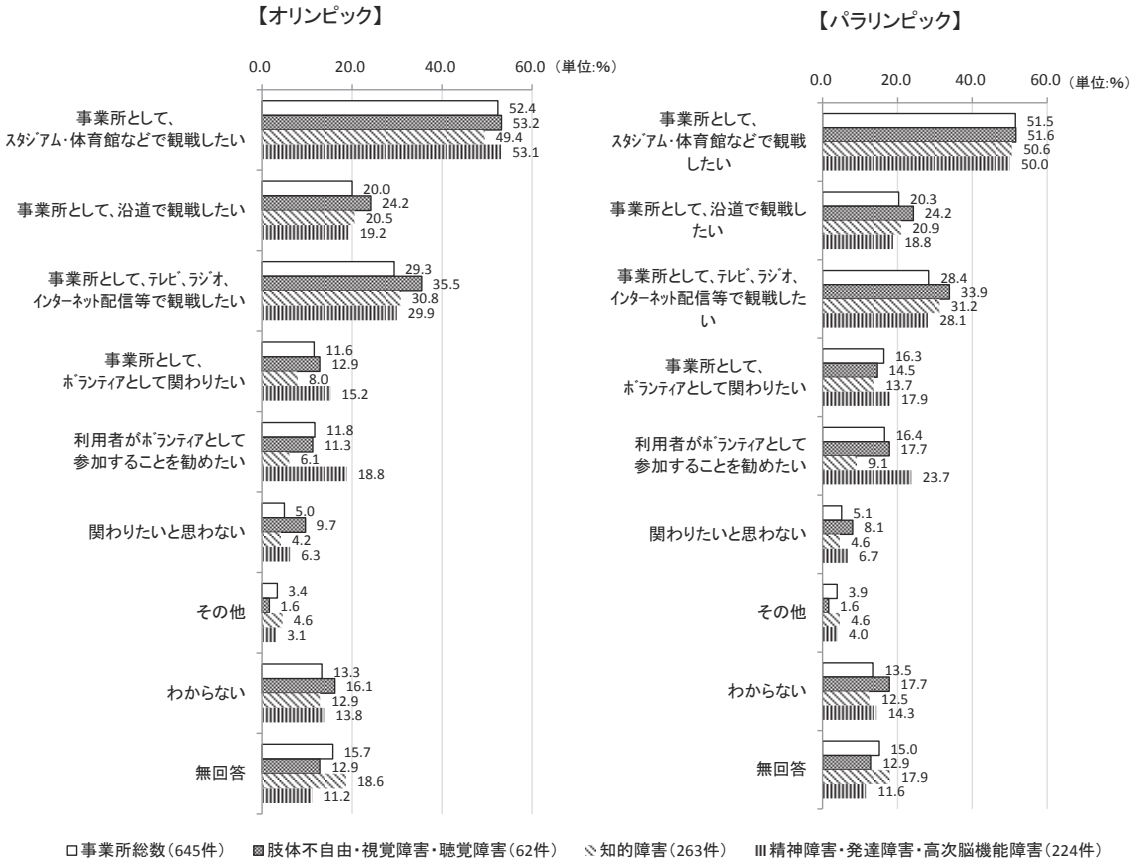
東京 2020 オリンピックでの関わり方の希望は、「事業所として、スタジアム・体育館などで観戦したい」の割合が最も高く 52.4%だった。次いで、「事業所として、テレビ、ラジオ、インターネット配信等で観戦したい」が 29.3%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、いずれも「事業所として、スタジアム・体育館などで観戦したい」の割合が高く、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は 53.2%、知的障害は 49.4%、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は 53.1%だった。

東京 2020 パラリンピックでの関わり方の希望は、「事業所として、スタジアム・体育館などで観戦したい」の割合が最も高く 51.5%だった。次いで、「事業所として、テレビ、ラジオ、インターネット配信等で観戦したい」が 28.4%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、いずれも「事業所として、スタジアム・体育館などで観戦したい」の割合が最も高く、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は 51.6%、知的障害は 50.6%、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は 50.0%だった。

図表 4-16　東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会への関わり方〔複数回答〕(Q9)
－最も利用者数が多い障害種別



(2) 東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会で関わりたいボランティア活動

① 東京 2020 オリンピック

（※東京 2020 オリンピックでの関わり方の希望で「事業所として、ボランティアとして関わりたい」「利用者がボランティアとして参加することを勧めたい」と回答した 104 事業所が対象）

東京 2020 オリンピックでの関わり方の希望で「事業所として、ボランティアとして関わりたい」「利用者がボランティアとして参加することを勧めたい」と回答した事業所について、東京 2020 オリンピックで関わりたいボランティアの種類をみると、「選手村・会場内での清掃」の割合が最も高く 53.8%だった。次いで、「選手村や会場の食堂での配膳」が 46.2%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「会場内での観客・大会関係者の誘導」「選手村や会場の食堂での配膳」の割合が最も高く、それぞれ 54.5%だった。次いで、「競技会場の最寄駅から会場までの観客案内」が 45.5%だった。知的障害では、「選手村・会場内での清掃」の割合が最も高く 50.0%だった。次いで、「選手村や会場の食堂での配膳」が 34.6%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「選手村・会場内での清掃」の割合が最も高く 60.4%だった。次いで、「選手村や会場の食堂での配膳」が 50.9%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「競技会場の最寄駅から会場までの観客案内」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「チケットチェック等の入場管理」「選手村でのハウスキーピング等」「選手村･会場内での清掃」の割合が高い傾向にあった。

② 東京 2020 パラリンピック

（※東京 2020 パラリンピックでの関わり方の希望で「事業所として、ボランティアとして関わりたい」「利用者がボランティアとして参加することを勧めたい」と回答した 146 事業所が対象）

東京 2020 パラリンピックでの関わり方の希望で「事業所として、ボランティアとして関わりたい」「利用者がボランティアとして参加することを勧めたい」と回答した事業所について、東京 2020 パラリンピックで関わりたいボランティアの種類をみると、「選手村・会場内での清掃」の割合が最も高く 48.6%だった。次いで、「会場内での観客・大会関係者の誘導」が 43.8%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「会場内での観客・大会関係者の誘導」「選手村や会場の食堂での配膳」の割合が最も高く、それぞれ 53.8%だった。次いで、「競技会場の最寄駅から会場までの観客案内」「選手村・会場内での清掃」がそれぞれ 38.5%だった。

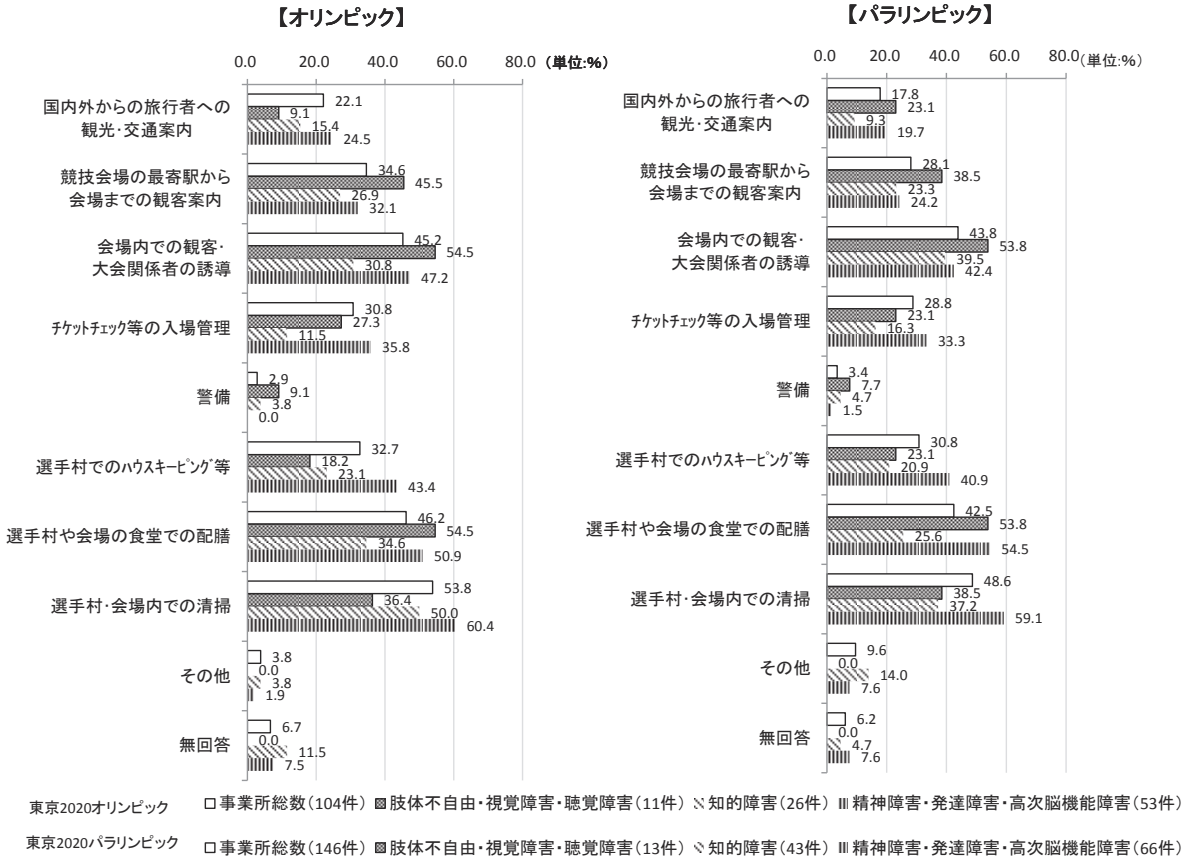
知的障害では、「会場内での観客・大会関係者の誘導」の割合が最も高く 39.5%だった。次いで、「選手村・会場内での清掃」が 37.2%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「選手村・会場内での清掃」の割合が最も

高く 59.1%だった。次いで、「選手村や会場の食堂での配膳」が 54.5%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「競技会場の最寄駅から会場までの観客案内」「会場内での観客・大会関係者の誘導」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「チケットチェック等の入場管理」「選手村でのハウスキーピング等」「選手村･会場内での清掃」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-17　東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会で関わりたい
ボランティア活動〔複数回答〕（Q9-1）－最も利用者数が多い障害種別



(3) 東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会で利用者がボランティアを行う際に必要な支援

① 東京 2020 オリンピック

（※東京 2020 オリンピックでの関わり方の希望で「事業所として、ボランティアとして関わりたい」「利用者がボランティアとして参加することを勧めたい」と回答した 104 事業所が対象）

東京 2020 オリンピックでの関わり方の希望で「事業所として、ボランティアとして関わりたい」「利用者がボランティアとして参加することを勧めたい」と回答した事業所について、東京 2020 オリンピックで利用者がボランティアを行う際に必要な支援をみると、「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が最も高く 57.7%だった。次いで、「活動の場までの送迎」が 51.9%だった。

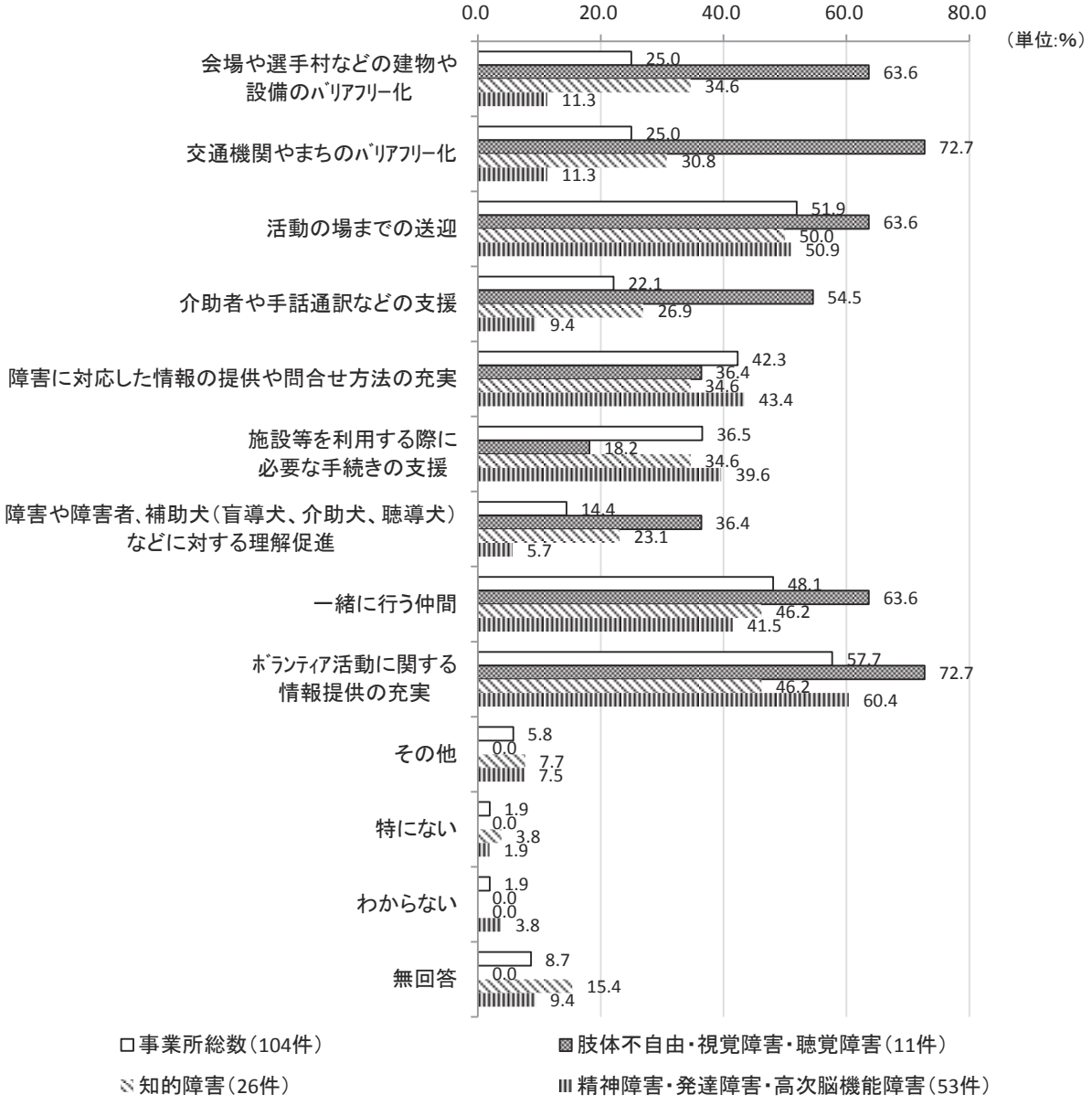
最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「交通機関やまちのバリアフリー化」「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が最も高く、それぞれ 72.7%だった。次いで、「会場や選手村などの建物や設備のバリアフリー化」「活動の場までの送迎」「一緒に行う仲間」がそれぞれ 63.6%だった。

知的障害では、「活動の場までの送迎」の割合が最も高く 50.0%だった。次いで、「一緒に行う仲間」「ボランティア活動に関する情報提供の充実」がそれぞれ 46.2%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が最も高く 60.4%だった。次いで、「活動の場までの送迎」が 50.9%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「会場や選手村などの建物や設備のバリアフリー化」「交通機関やまちのバリアフリー化」「活動の場までの送迎」「介助者や手話通訳などの支援」「障害や障害者､補助犬（盲導犬、介助犬、聴導犬）などに対する理解促進」「一緒に行う仲間」「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-18　東京 2020 オリンピックで利用者がボランティアを行う際に必要な支援
〔複数回答〕（Q9-2）－最も利用者数が多い障害種別



② 東京 2020 パラリンピック

（※東京 2020 パラリンピックでの関わり方の希望で「事業所として、ボランティアとして関わりたい」「利用者がボランティアとして参加することを勧めたい」と回答した 146 事業所が対象）

東京 2020 パラリンピックでの関わり方の希望で「事業所として、ボランティアとして関わりたい」「利用者がボランティアとして参加することを勧めたい」と回答した事業所について、東京 2020 パラリンピックで利用者がボランティアを行う際に必要な支援をみると、「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が最も高く 58.2%だった。次いで、「活動の場までの送迎」が 50.7%だった。

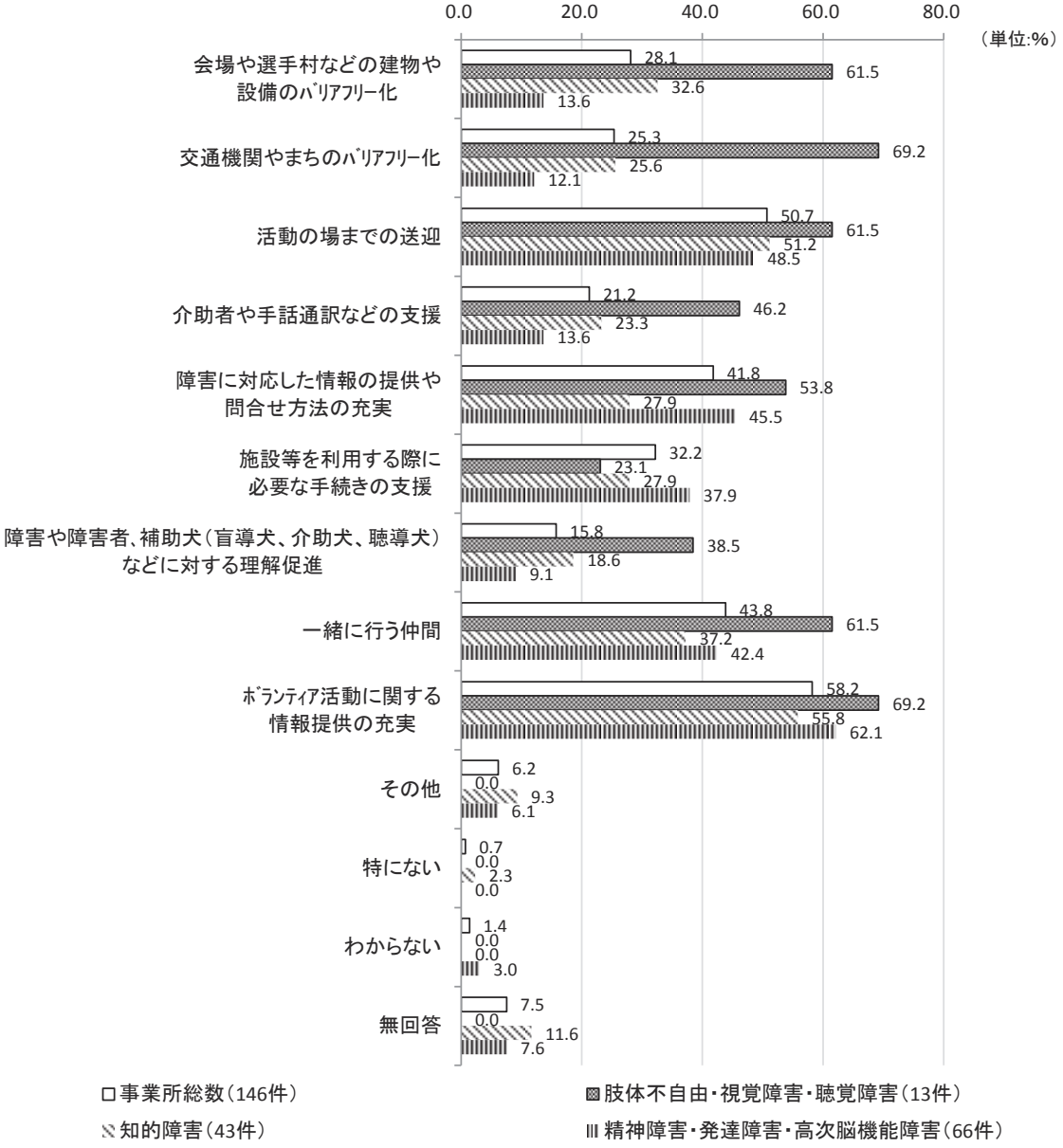
最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「交通機関やまちのバリアフリー化」「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が最も高く、それぞれ 69.2%だった。次いで、「会場や選手村などの建物や設備のバリアフリー化」「活動の場までの送迎」「一緒に行う仲間」がそれぞれ 61.5%だった。

知的障害では、「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が最も高く 55.8%だった。次いで、「活動の場までの送迎」が 51.2%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が最も高く 62.1%だった。次いで、「活動の場までの送迎」が 48.5%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「会場や選手村などの建物や設備のバリアフリー化」「交通機関やまちのバリアフリー化」「活動の場までの送迎」「介助者や手話通訳などの支援」「障害や障害者、補助犬（盲導犬、介助犬、聴導犬）などに対する理解促進」「一緒に行う仲間」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「施設等を利用する際に必要な手続きの支援」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-19　東京 2020 パラリンピックで利用者がボランティアを行う際に必要な支援〔複数回答〕（Q9-2）－最も利用者数が多い障害種別



4　文化、芸術活動について

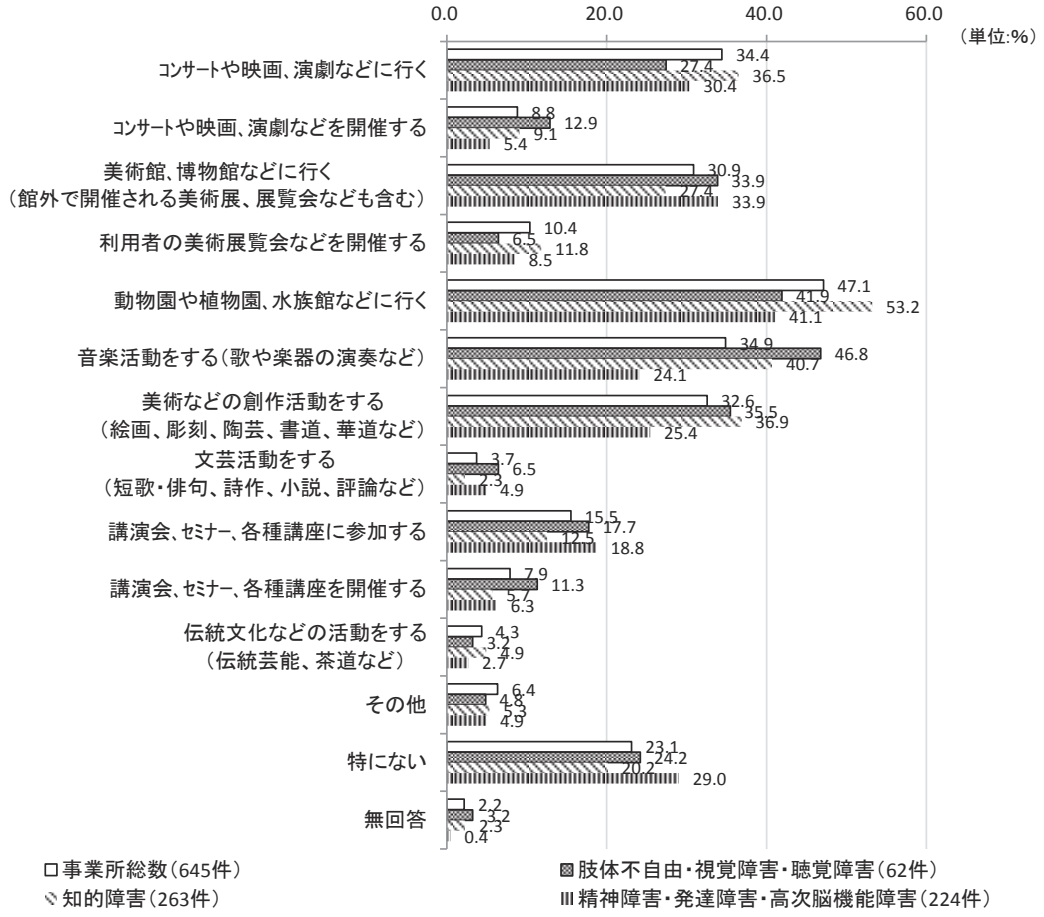
(1) 文化、芸術活動に関するイベント・取組の状況

文化、芸術活動に関するイベント・取組の状況は、「動物園や植物園、水族館などに行く」の割合が最も高く 47.1%だった。次いで、「音楽活動をする（歌や楽器の演奏など）」が 34.9%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「音楽活動をする（歌や楽器の演奏など）」の割合が最も高く 46.8%だった。次いで、「動物園や植物園、水族館などに行く」が 41.9%だった。知的障害では、「動物園や植物園、水族館などに行く」の割合が最も高く、53.2%だった。次いで、「音楽活動をする（歌や楽器の演奏など）」が 40.7%だった。精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「動物園や植物園、水族館などに行く」の割合が最も高く 41.1%だった。次いで、「美術館、博物館などに行く（館外で開催される美術展、展覧会なども含む）」が 33.9%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、知的障害は「動物園や植物園、水族館などに行く」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-20　文化、芸術活動に関するイベント・取組の状況〔複数回答〕（Q10）
－最も利用者数が多い障害種別



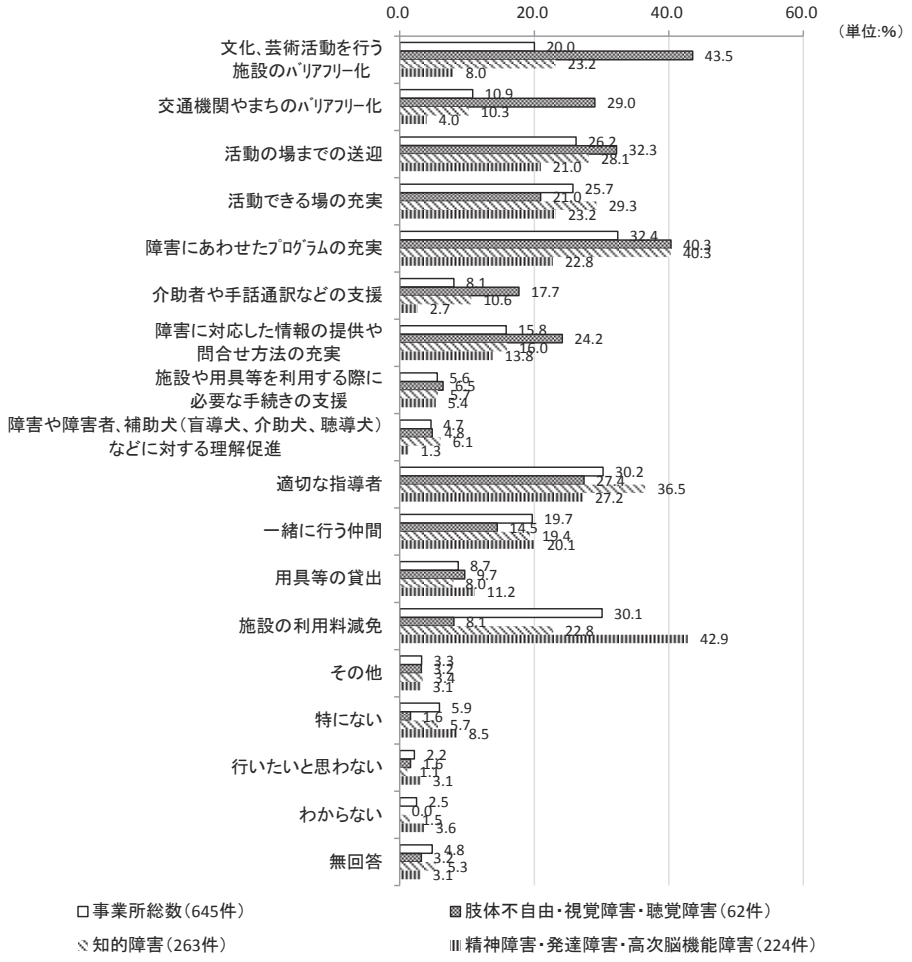
(2) 文化、芸術活動に関するイベント・取組を行う際に必要な支援

文化、芸術活動に関するイベント・取組を行う際に必要な支援は、「障害にあわせたプログラムの充実」の割合が最も高く 32.4%だった。次いで、「適切な指導者」が 30.2%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「文化、芸術活動を行う施設のバリアフリー化」の割合が最も高く 43.5%だった。次いで、「障害にあわせたプログラムの充実」が 40.3%だった。知的障害では、「障害にあわせたプログラムの充実」の割合が最も高く 40.3%だった。次いで、「適切な指導者」が 36.5%だった。精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「施設の利用料減免」の割合が最も高く 42.9%だった。次いで、「適切な指導者」が 27.2%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「文化､芸術活動を行う施設のバリアフリー化」「交通機関やまちのバリアフリー化」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「施設の利用料減免」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-21　文化、芸術活動に関するイベント・取組を行う際に必要な支援〔３つまで〕(Q11)
－最も利用者数が多い障害種別



5 ボランティア活動について

(1) 利用者のボランティア活動参加についての事業所の考え

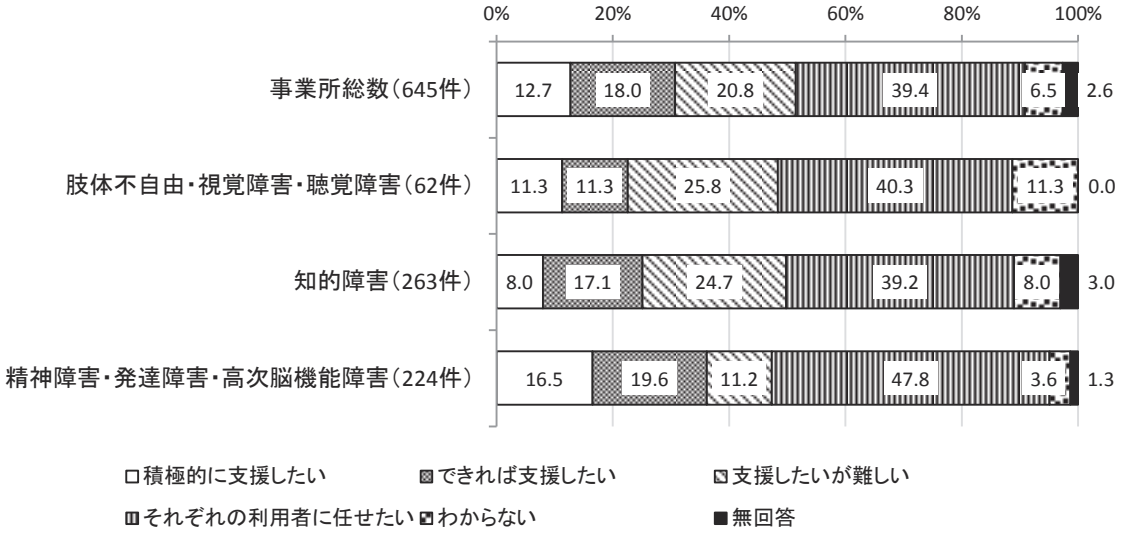
利用者のボランティア活動参加についての事業所の考えは、「それぞれの利用者に任せたい」の割合が最も高く 39.4%だった。次いで、「支援したいが難しい」が 20.8%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「それぞれの利用者に任せたい」の割合が最も高く 40.3%だった。次いで、「支援したいが難しい」が 25.8%だった。

知的障害では、「それぞれの利用者に任せたい」の割合が最も高く 39.2%だった。次いで、「支援したいが難しい」が 24.7%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「それぞれの利用者に任せたい」の割合が最も高く 47.8%だった。次いで、「できれば支援したい」が 19.6%だった。

図表 4-22　利用者のボランティア活動参加についての事業所の考え〔単数回答〕(Q12)
－最も利用者数が多い障害種別



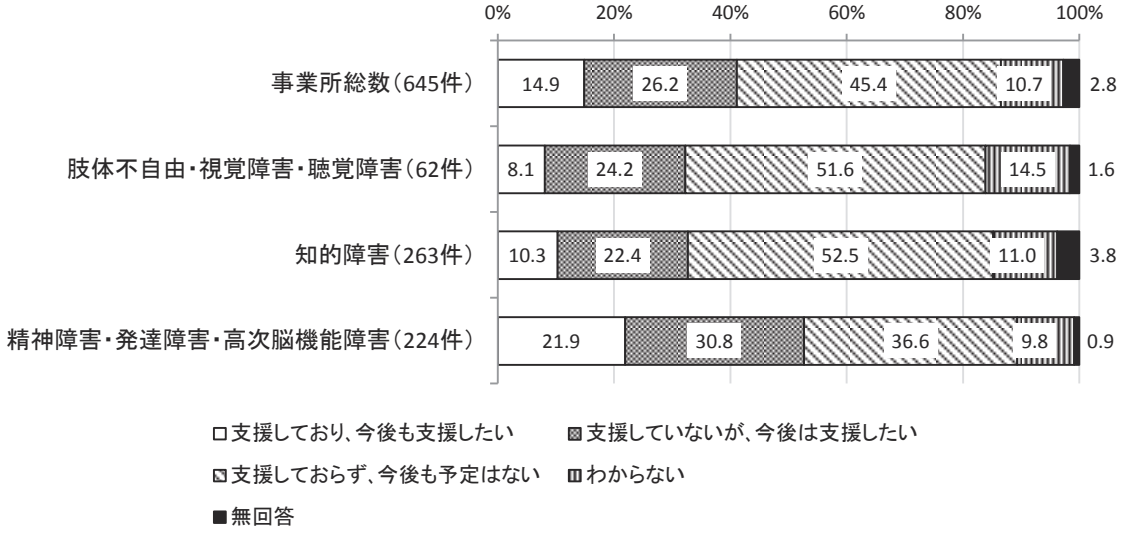
(2) 利用者のボランティア活動参加への支援状況

利用者のボランティア活動参加への支援状況は、「支援しておらず、今後も予定はない」の割合が最も高く 45.4%だった。次いで、「支援していないが、今後は支援したい」が 26.2%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、いずれも「支援しておらず、今後も予定はない」の割合が高く、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は 51.6%、知的障害は 52.5%、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は 36.6%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「支援しており、今後も支援したい」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-23　利用者のボランティア活動参加への支援状況〔単数回答〕(Q13)
－最も利用者数が多い障害種別



(3) ボランティア活動への参加支援の分野

① 今までに支援したことがあるボランティア活動の分野

（※利用者のボランティア活動参加への支援状況で「支援しており、今後も支援したい」「支援していないが、今後は支援したい」と回答した 265 事業所が対象）

利用者のボランティア活動参加への支援状況で「支援しており、今後も支援したい」「支援していないが、今後は支援したい」と回答した事業所について、今までに支援したことがあるボランティア活動の分野をみると、「お祭り、町会・自治会などの地域の活動」の割合が最も高く 36.2%だった。次いで、「障害者､高齢者等の支援などの福祉､医療に関する活動」が 21.9%だった。

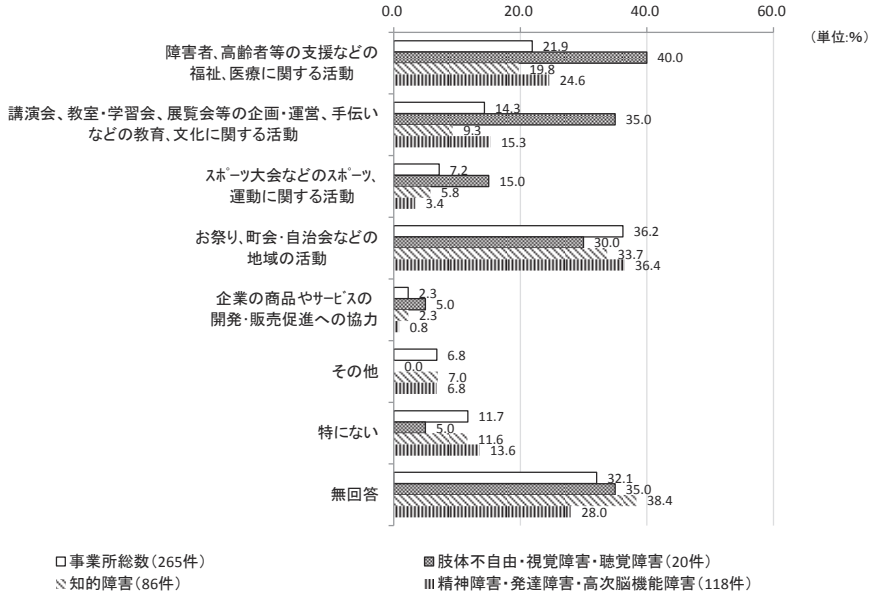
最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「障害者、高齢者等の支援などの福祉、医療に関する活動」の割合が最も高く、40.0%だった。次いで、「講演会、教室・学習会、展覧会等の企画・運営、手伝いなどの教育、文化に関する活動」「無回答」がそれぞれ 35.0%だった。

知的障害では、「お祭り、町会・自治会などの地域の活動」が 33.7%だった。「無回答」も 38.4%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「お祭り、町会・自治会などの地域の活動」の割合が最も高く、36.4%だった。「無回答」も 28.0%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「障害者､高齢者等の支援などの福祉､医療に関する活動」「講演会、教室・学習会、展覧会等の企画・運営、手伝いなどの教育、文化に関する活動」「スポーツ大会などのスポーツ、運動に関する活動」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-24　今までに支援したことがあるボランティア活動の分野〔複数回答〕（Q13-1）
－最も利用者数が多い障害種別



② 今後支援したいボランティア活動の分野

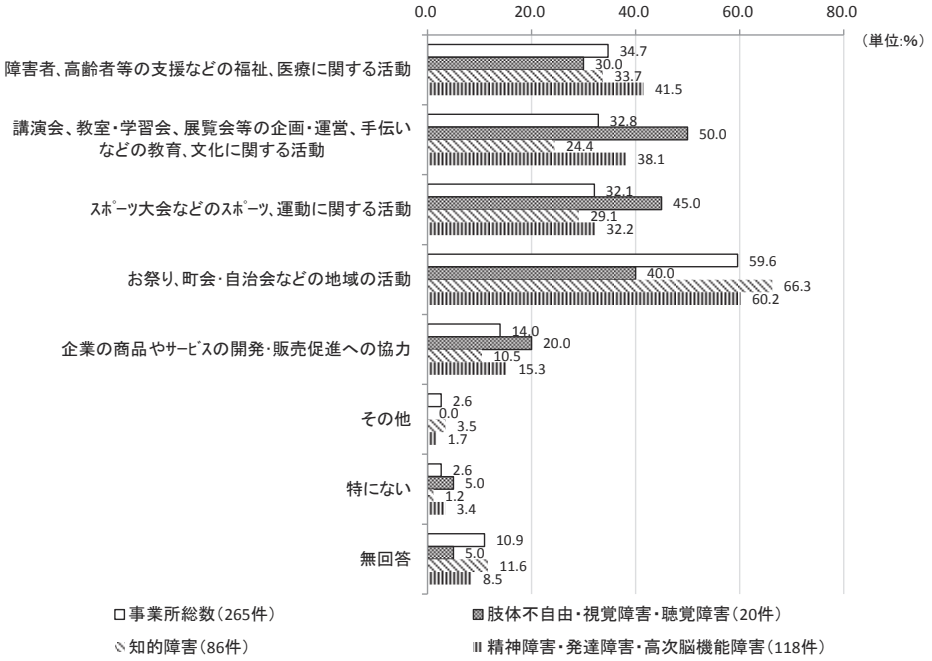
（※利用者のボランティア活動参加への支援状況で「支援しており、今後も支援したい」「支援していないが、今後は支援したい」と回答した 265 事業所が対象）

利用者のボランティア活動参加への支援状況で「支援しており、今後も支援したい」「支援していないが、今後は支援したい」と回答した事業所について、今後支援したいボランティア活動の分野をみると、「お祭り、町会・自治会などの地域の活動」の割合が最も高く 59.6%だった。次いで、「障害者、高齢者等の支援などの福祉、医療に関する活動」が 34.7%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「講演会、教室・学習会、展覧会等の企画・運営、手伝いなどの教育、文化に関する活動」の割合が最も高く 50.0%だった。次いで、「スポーツ大会などのスポーツ、運動に関する活動」が 45.0%だった。知的障害では、「お祭り、町会・自治会などの地域の活動」の割合が最も高く 66.3%だった。次いで、「障害者、高齢者等の支援などの福祉、医療に関する活動」が 33.7%だった。精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「お祭り、町会・自治会などの地域の活動」の割合が最も高く 60.2%だった。次いで、「障害者、高齢者等の支援などの福祉、医療に関する活動」が 41.5%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「講演会、教室・学習会、展覧会等の企画・運営、手伝いなどの教育、文化に関する活動」「スポーツ大会などのスポーツ、運動に関する活動」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-25　今後支援したいボランティア活動の分野〔複数回答〕（Q13-1）
ー最も利用者数が多い障害種別



(4) ボランティア活動への参加支援の内容

① 今までに支援したことがあるボランティア活動の内容

（※利用者のボランティア活動参加への支援状況で「支援しており、今後も支援したい」「支援していないが、今後は支援したい」と回答した 265 事業所が対象）

利用者のボランティア活動参加への支援状況で「支援しており、今後も支援したい」「支援していないが、今後は支援したい」と回答した事業所について、今までに支援したことがあるボランティア活動の内容をみると、「イベント等の会場準備の手伝い」が 23.0%、「清掃」が 18.1%、「活動の指導、手伝い」が 17.4%だった。

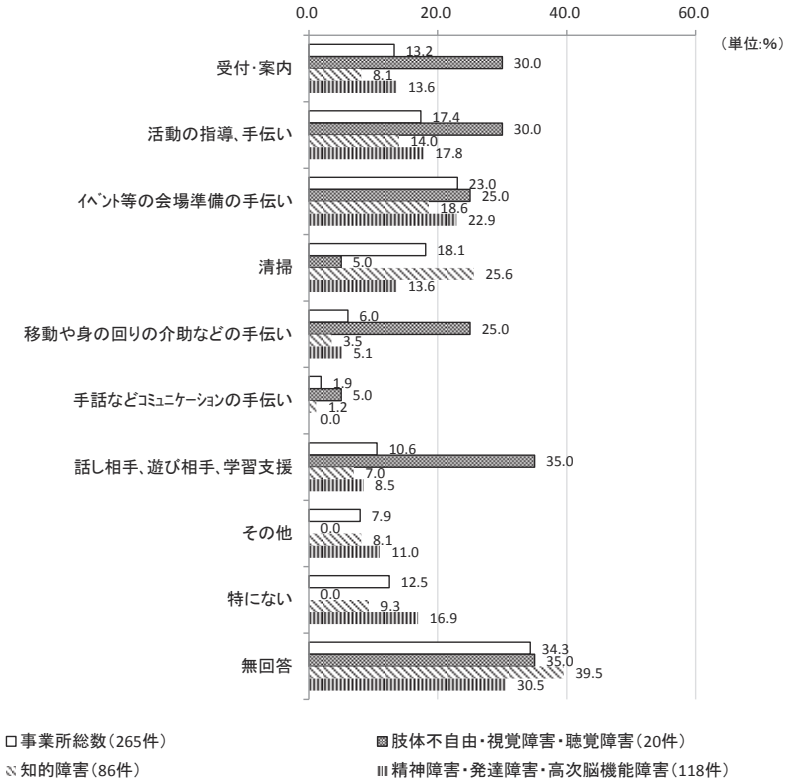
最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「話し相手、遊び相手、学習支援」の割合が最も高く 35.0%だった。次いで、「受付・案内」「活動の指導、手伝い」がそれぞれ 30.0%だった。

知的障害では、「清掃」が 25.6%、「イベント等の会場準備の手伝い」が 18.6%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「イベント等の会場準備の手伝い」が 22.9%、「活動の指導、手伝い」が 17.8%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「受付・案内」「活動の指導、手伝い」「移動や身の回りの介助などの手伝い」「話し相手、遊び相手、学習支援」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-26　今までに支援したことがあるボランティア活動の内容〔複数回答〕（Q13-2）
－最も利用者数が多い障害種別



② 今後支援したいボランティア活動の内容

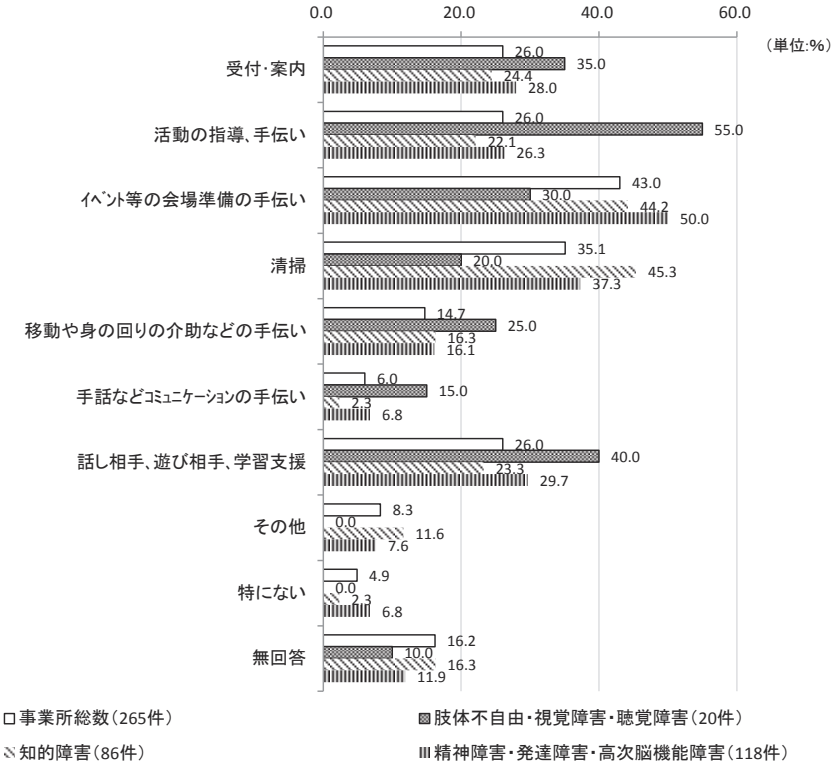
（※利用者のボランティア活動参加への支援状況で「支援しており、今後も支援したい」「支援していないが、今後は支援したい」と回答した 265 事業所が対象）

利用者のボランティア活動参加への支援状況で「支援しており、今後も支援したい」「支援していないが、今後は支援したい」と回答した事業所について、今後支援したいボランティア活動の内容をみると、「イベント等の会場準備の手伝い」の割合が最も高く 43.0%だった。次いで、「清掃」が 35.1%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「活動の指導、手伝い」の割合が最も高く 55.0%だった。次いで、「話し相手、遊び相手、学習支援」が 40.0%だった。知的障害では、「清掃」の割合が最も高く 45.3%だった。次いで、「イベント等の会場準備の手伝い」が 44.2%だった。精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「イベント等の会場準備の手伝い」の割合が最も高く 50.0%だった。次いで、「清掃」が 37.3%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「活動の指導、手伝い」「移動や身の回りの介助などの手伝い」「手話などコミュニケーションの手伝い」「話し相手、遊び相手、学習支援」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-27　今後支援したいボランティア活動の内容〔複数回答〕（Q13-2）
－最も利用者数が多い障害種別



(5) 利用者のボランティア活動の後押しに必要な支援

利用者のボランティア活動の後押しに必要な支援は、「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が最も高く 38.6%だった。次いで、「一緒に行う仲間」が 32.1%だった。

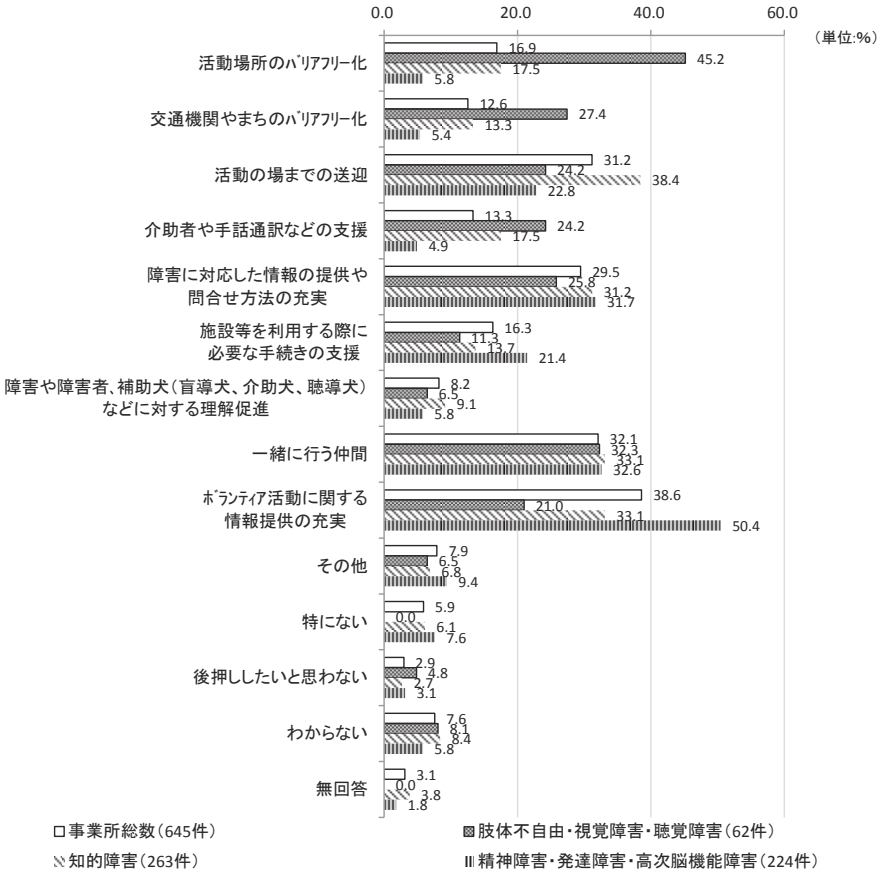
最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「活動場所のバリアフリー化」の割合が最も高く 45.2%だった。次いで、「一緒に行う仲間」が 32.3%だった。

知的障害では、「活動の場までの送迎」の割合が最も高く 38.4%だった。次いで、「一緒に行う仲間」「ボランティア活動に関する情報提供の充実」がそれぞれ 33.1%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が最も高く 50.4%だった。次いで、「一緒に行う仲間」が 32.6%、「障害に対応した情報の提供や問合せ方法の充実」が 31.7%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「活動場所のバリアフリー化」「交通機関やまちのバリアフリー化」、知的障害は「活動の場までの送迎」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-28　利用者のボランティア活動の後押しに必要な支援〔３つまで〕(Q14)
－最も利用者数が多い障害種別



(6) 利用者が行うボランティア活動の分野

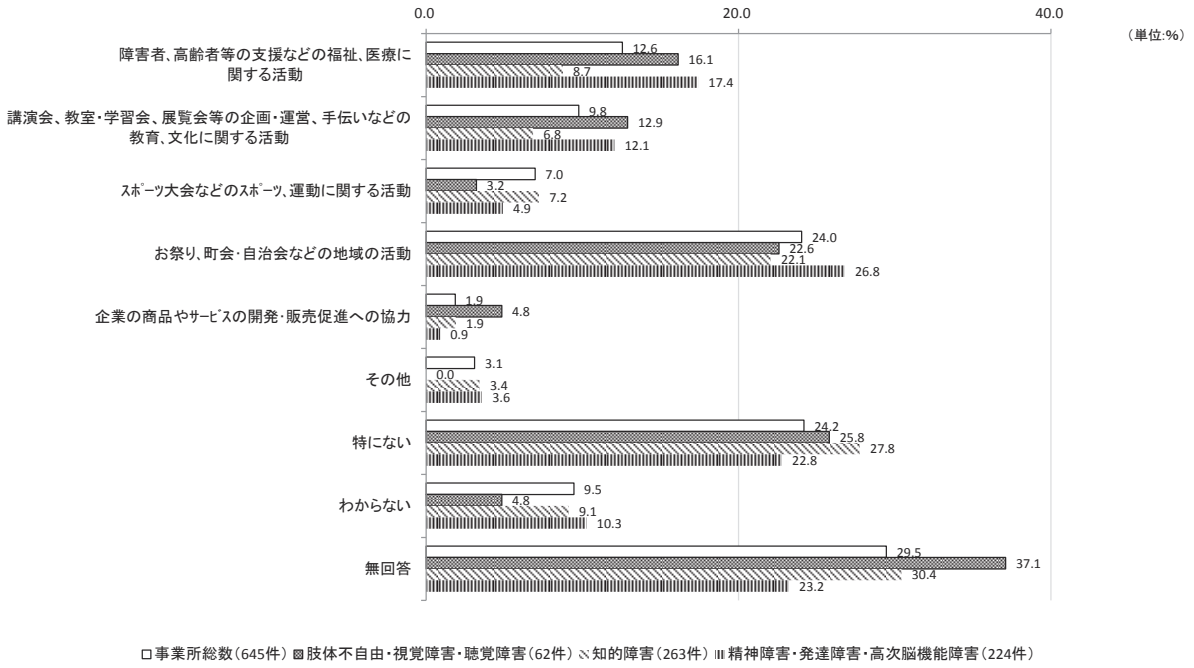
① これまでに利用者が参加したボランティア活動の分野

これまでに利用者が参加したボランティア活動の分野は、「お祭り、町会・自治会などの地域の活動」が 24.0%、「障害者、高齢者等の支援などの福祉、医療に関する活動」が 12.6%だった。「特にない」も 24.2%であった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、いずれも、「お祭り、町会・自治会などの地域の活動」の割合が高く、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では 22.6%、知的障害では 22.1%、精神障害・発達障害・高次脳機能障害では 26.8%だった。

また、「特にない」の割合も高く、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では 25.8%、知的障害では 27.8%、精神障害・発達障害・高次脳機能障害では 22.8%だった。

図表 4-29　これまでに利用者が参加したボランティア活動の分野〔複数回答〕(Q15)
ー最も利用者数が多い障害種別



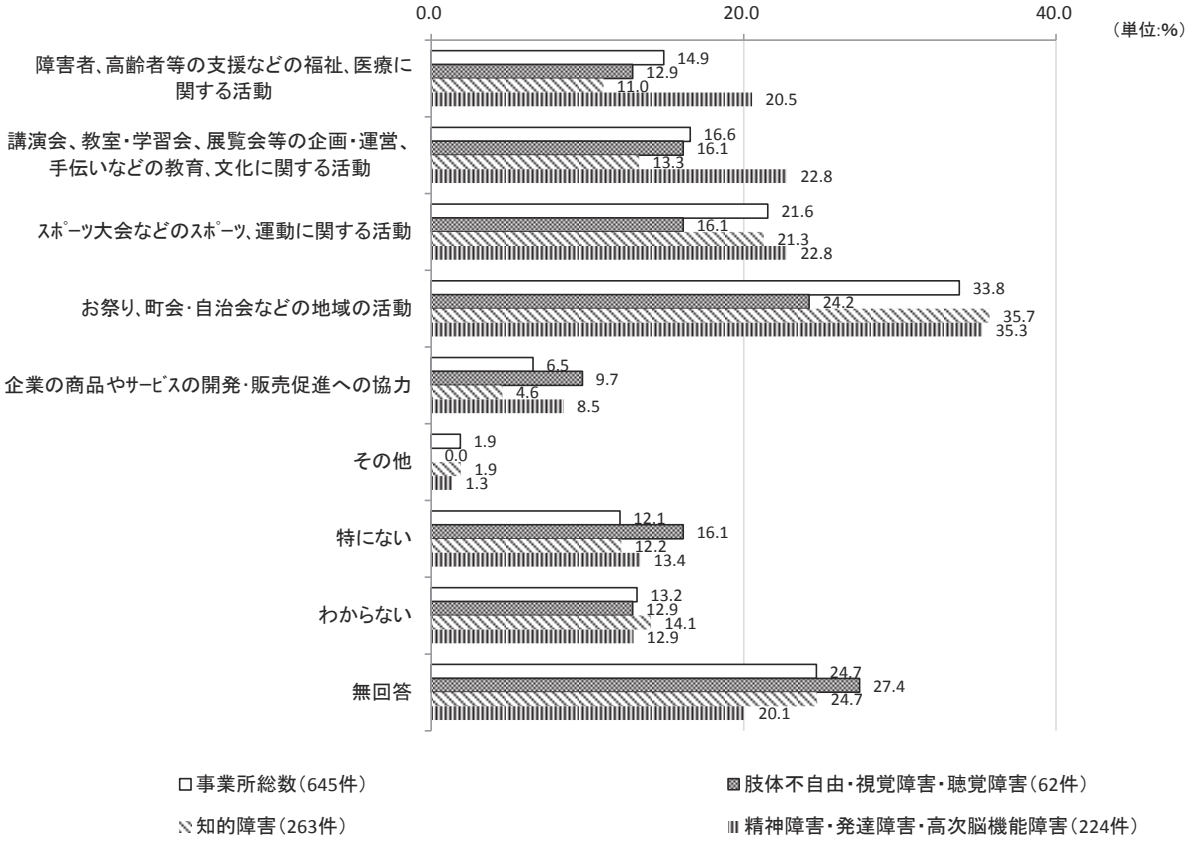
② 今後利用者に勧めたいボランティア活動の分野

今後利用者に勧めたいボランティア活動の分野は、「お祭り、町会・自治会などの地域の活動」が 33.8%、「スポーツ大会などのスポーツ、運動に関する活動」が 21.6%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、いずれも、「お祭り、町会・自治会などの地域の活動」の割合が高く、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では 24.2%、知的障害では 35.7%、精神障害・発達障害・高次脳機能障害では 35.3%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「障害者、高齢者等の支援などの福祉、医療に関する活動」「講演会、教室・学習会、展覧会等の企画・運営、手伝いなどの教育、文化に関する活動」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-30　今後利用者に勧めたいボランティア活動の分野〔複数回答〕（Q15）
ー最も利用者数が多い障害種別



(7) 利用者が行うボランティア活動の内容

① これまでに利用者が参加したボランティア活動の内容

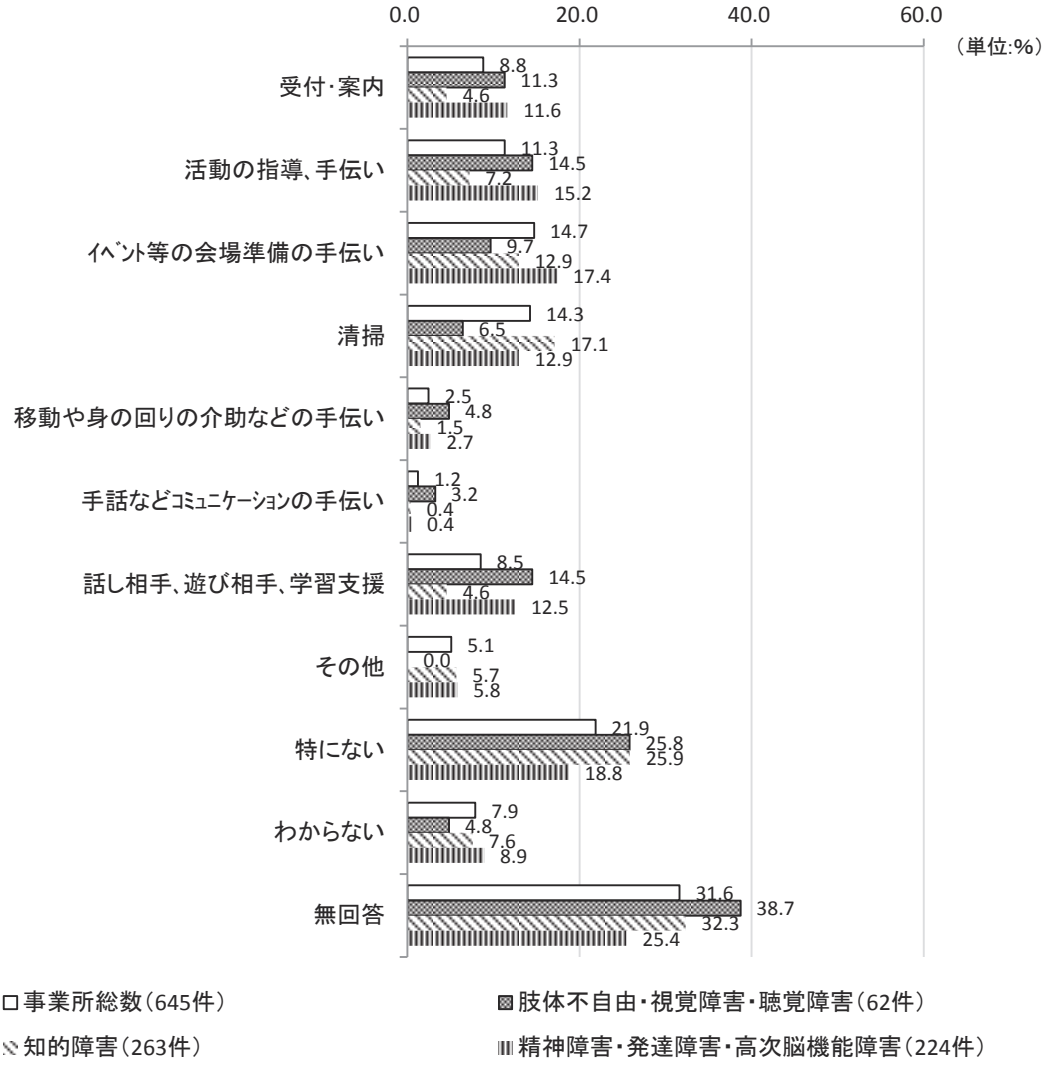
これまでに利用者が参加したボランティア活動の内容は、「イベント等の会場準備の手伝い」が 14.7%、「清掃」が 14.3%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「活動の指導、手伝い」「話し相手、遊び相手、学習支援」がそれぞれ 14.5%だった。

知的障害では、「清掃」が 17.1%、「イベント等の会場準備の手伝い」が 12.9%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「イベント等の会場準備の手伝い」が 17.4%、「活動の指導、手伝い」が 15.2%だった。

図表 4-31　これまでに利用者が参加したボランティア活動の内容〔複数回答〕(Q15)
－最も利用者数が多い障害種別



② 今後利用者に勧めたいボランティア活動の内容

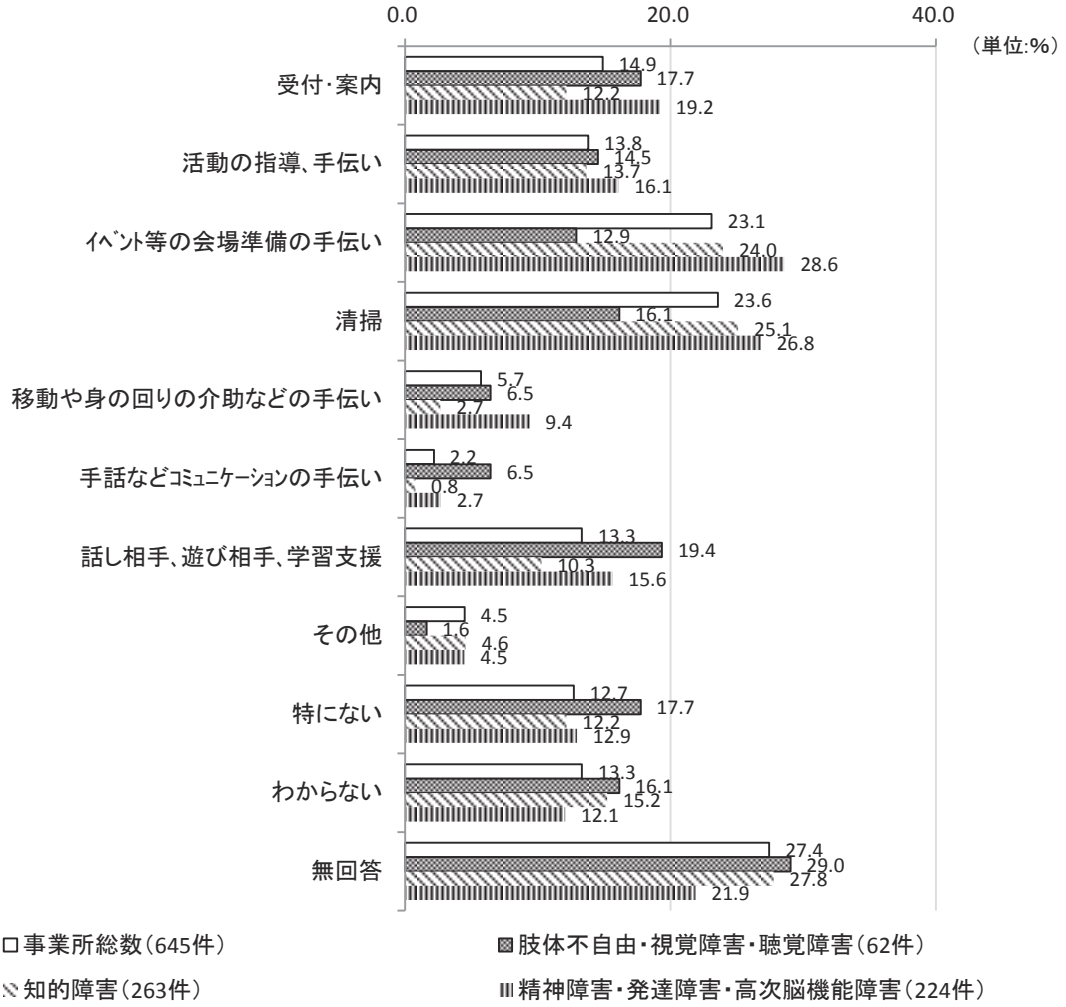
今後利用者に勧めたいボランティア活動の内容は、「清掃」が 23.6%、「イベント等の会場準備の手伝い」が 23.1%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「話し相手、遊び相手、学習支援」が 19.4%、「受付･案内」が 17.7%だった。

知的障害では、「清掃」が 25.1%、「イベント等の会場準備の手伝い」が 24.0%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「イベント等の会場準備の手伝い」が 28.6%、「清掃」が 26.8%だった。

図表 4-32　今後利用者に勧めたいボランティア活動の内容〔複数回答〕（Q15）
－最も利用者数が多い障害種別



(8) 利用者がボランティア活動をする上で必要な支援

利用者のボランティア活動に必要な支援は、「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が最も高く、36.1%だった。次いで、「活動の場までの送迎」が 34.6%だった。

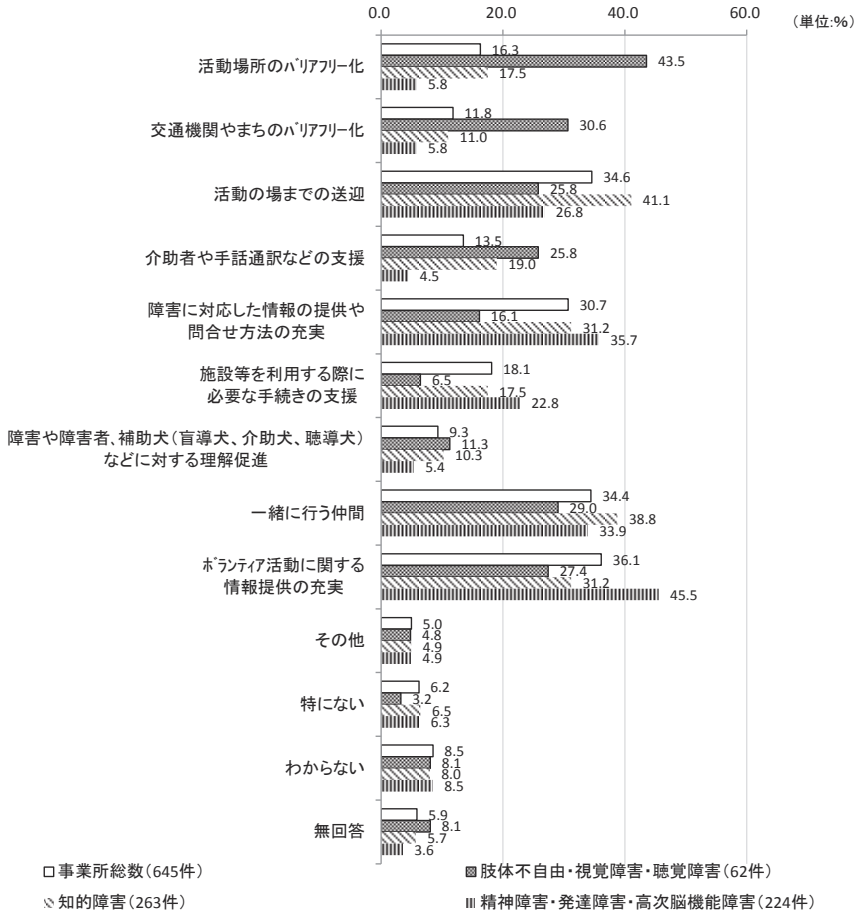
最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「活動場所のバリアフリー化」の割合が最も高く 43.5%だった。次いで、「交通機関やまちのバリアフリー化」が 30.6%だった。

知的障害では、「活動の場までの送迎」の割合が最も高く 41.1%だった。次いで、「一緒に行う仲間」が 38.8%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が最も高く 45.5%だった。次いで、「障害に対応した情報の提供や問合せ方法の充実」が 35.7%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「活動場所のバリアフリー化」「交通機関やまちのバリアフリー化」、知的障害は「活動の場までの送迎」、精神障害・発達障害・高次脳機能障害は「ボランティア活動に関する情報提供の充実」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-33　利用者がボランティア活動をする上で必要な支援〔３つまで〕（Q16）
ー最も利用者数が多い障害種別



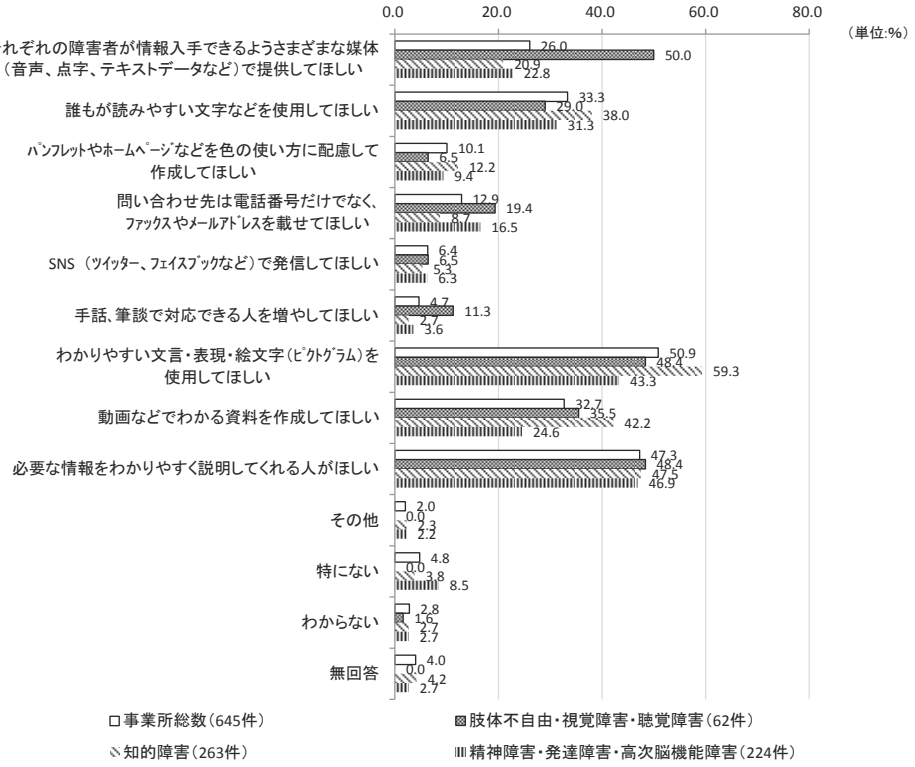
6 情報アクセシビリティについて

利用者の情報入手やコミュニケーションにあるとよい配慮は、「わかりやすい文言・表現・絵文字（ピクトグラム）を使用してほしい」の割合が最も高く 50.9%だった。次いで、「必要な情報をわかりやすく説明してくれる人がほしい」が 47.3%だった。

最も利用者数が多い障害種別にみると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）では、「それぞれの障害者が情報入手できるようさまざまな媒体（音声、点字、テキストデータなど）で提供してほしい」の割合が最も高く 50.0%だった。次いで、「わかりやすい文言・表現・絵文字（ピクトグラム）」を使用してほしい」「必要な情報をわかりやすく説明してくれる人がほしい」がそれぞれ 48.4%だった。

知的障害では、「わかりやすい文言・表現・絵文字（ピクトグラム）を使用してほしい」の割合が最も高く 59.3%だった。次いで、「必要な情報をわかりやすく説明してくれる人がほしい」が 47.5%だった。

精神障害・発達障害・高次脳機能障害では、「必要な情報をわかりやすく説明してくれる人がほしい」の割合が最も高く 46.9%だった。次いで、「わかりやすい文言・表現・絵文字（ピクトグラム）を使用してほしい」が 43.3%だった。

最も利用者数が多い障害種別に比較すると、他と比較して、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害（身体障害）は「それぞれの障害者が情報入手できるようさまざまな媒体（音声、点字、テキストデータなど）で提供してほしい」、知的障害は「わかりやすい文言・表現・絵文字（ピクトグラム）を使用してほしい」の割合が高い傾向にあった。

図表 4-34　利用者の情報入手やコミュニケーションにあるとよい配慮〔３つまで〕（Q17）
－最も利用者数が多い障害種別